坂戸上野遺跡・古墳発掘調査報告書

－ 運動公園整備事業に伴う発掘調査報告書 －

2014

岐阜県 可児市教育委員会

例　　言

1．本書は、岐阜県可児市坂戸 972 番地 1 外における坂戸上野遺跡（21214-04729）、坂戸上野古墳（21214 － 04728）の緊急発掘調査報告書である。
2．本調査は可児市が事業主体となって実施する運動公園整備事業に伴うものである。現場作業及び整理作業は、可児市教育委員会がすべて直営で実施した。
調査面積は、約 1300 ㎡である。
3．現場及び整理作業の体制は、次のとおりである。

現場作業（平成 22 年度）

教育長	井戸　英彦				
教育部長	亀井　和紀				
文化振興課長	林　　良治				
文化財係長	今井　博樹				
調査担当者	長江　真和				
調査補助員	成尾　孝子	本田　博志			
作業員	可児　定夫	五木田かちこ	遠山　皓一	長沼　信雄	前田　友子
	山口　正則				

整理作業（平成 26 年度）

教育長	篭橋　義朗	
教育委員会事務局長	高木　美和	
教育文化財課長	長瀬　治義	
文化財係長	大津　　誠	
整理担当者	長江　真和	
整理作業員	本田　博志	吉田希美江

4．本書の執筆は第 3 章第 2 節遺物の中の石器はみよし市教育委員会　平井義敏が、第 4 章第 2 節遺物の中の鉄鉾、石突は元興寺文化財研究所　初村武寛が行い、それ以外は長江が担当し、編集は長江が行った。遺物の整理は本田・吉田が行い、実測は平井・初村・長江・本田・吉田が、トレースは平井、初村、長江が行った。
5．遺物の図面及び写真は、口縁部や底部など土器の特徴がわかるものを選別して掲載し、小破片は掲載していない。
6．出土した鉄製品の保存処理は古美術修理　すぎもとに委託した。
7．本調査にあたり、次の方々にご教示を頂きました。記して、お礼を申し上げます。
（敬称・肩書略、五十音順）
李　浩基　　島田　崇正　　林　和範　　藤村　俊　　森島　一貴
8．本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市教育委員会（可児郷土歴史館）で保管している。

目　　次

例　言

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1

第２章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第３章　坂戸上野遺跡 …… 7
　第１節　遺構 …… 7
　第２節　遺物 …… 8
　第３節　まとめ ……16

第４章　坂戸上野古墳 ……17
　第１節　遺構 ……17
　第２節　遺物 ……28
　第３節　まとめ ……35

報告書抄録……46

坂戸上野遺跡・古墳図版目次

図 1　周辺遺跡分布図……3
図 2　坂戸上野遺跡・古墳遺構分布図……5
図 3　SB1 実測図　……9
図 4　SB2 実測図　……9
図 5　SB2 炉跡と石材検出状況　…… 10
図 6　SB2 土層断面図　…… 10
図 7　坂戸上野遺跡出土遺物 1 …… 11
図 8　坂戸上野遺跡出土遺物 2 …… 12
図 9　坂戸上野遺跡出土遺物 3 …… 13
図 10　坂戸上野遺跡出土遺物 4 …… 14
図 11　坂戸上野遺跡出土遺物 5 …… 15
図 12　墳丘南北断面図（石室横断）…… 21
図 13　墳丘東西断面図（石室縦断）…… 21
図 14　墳丘断面図…… 21
図 15　天井石堆積土断面図…… 21
図 16　坂戸上野古墳石室展開図…… 23
図 17　石室平面図（天井石重ね）…… 25
図 18　閉塞部分立面図（玄室から）…… 25
図 19　閉塞石立面図（羨道入口から）… 25
図 20　石室断面図…… 26
図 21　床面遺物出土状況平面図…… 27
図 22　坂戸上野古墳出土遺物 1 …… 31
図 23　坂戸上野古墳出土遺物 2 …… 32
図 24　鉄製品 X 線写真　…… 33

表　目　次

表 1　周辺遺跡一覧表……3
表 2　坂戸上野遺跡石器観察表…… 16
表 3　坂戸上野古墳遺物観察表…… 34

写　真　図　版　目　次

図版 1　坂戸上野遺跡現場写真…… 36
図版 2　坂戸上野遺跡出土遺物 1 …… 37
図版 3　坂戸上野遺跡出土遺物 2 …… 38
図版 4　坂戸上野古墳現場写真 1 …… 39
図版 5　坂戸上野古墳現場写真 2 …… 40
図版 6　坂戸上野古墳現場写真 3 …… 41
図版 7　坂戸上野古墳現場写真 4 …… 42
図版 8　坂戸上野古墳出土遺物 1 …… 43
図版 9　坂戸上野古墳出土遺物 2 …… 44
図版 10　坂戸上野古墳出土遺物 3 …… 45

第１章　地理的・歴史的環境

地理的環境

可児市は、岐阜県中南部、木曽川中流左岸に位置し、東は加茂郡八百津町伊岐津志、南及び西を可児郡御嵩町伏見、北は木曽川を隔て加茂郡八百津町和知と境をなしている。平成 17 年５月に可児郡兼山町と飛び地合併した。

遺跡の立地は可児川が開折した沖積地からの比高 31 m前後、丘陵平坦面の標高は 109 m程度を測る。この台地状の丘陵の北側部分は、木曽川の高位段丘に位置付けられ段丘堆積物からなり、頂部は平坦な地形となっている。

歴史的環境

古くは坂戸上野古墳付近にも何基か古墳があったようで、坂戸上野２号墳（3）のみ大まかな位置を押さえられているものの、現在は姿を消している。坂戸上野古墳の南 20m 程の地点からは、7 世紀中頃の須恵器の甕が出土したといわれる。坂戸上野古墳の北側には沖積地が広がるが、現在のところ、遺跡は確認できていない。山畑遺跡（4）、井之鼻遺跡（5）は縄文時代の遺物が表採されている。徳野遺跡（7）は、昭和 61 年と平成７年に発掘調査が行われ、縄文・弥生・古墳時代の住居跡などが検出されている。徳野陣屋跡（8）は、平岡石見守頼勝が関ヶ原の戦功により、慶長九年（1604）に美濃国可児郡など一万石余を与えられ､屋敷を構えたことに始まる。寛文二年（1662）に笠松に陣屋を移転するまで陣屋として機能していた。（10）は、徳野に屋敷を構えた平岡石見守頼勝の墓所である。8・10 は市の指定史跡となっている。禅台寺山遺跡（9）は範囲等がはっきりしないが過去に弥生土器や土師器などが出土している。鳴子東遺跡（11）、鳴子西遺跡（12）は縄文時代の散布地であるが詳細はつかめていない。

第２章　調査に至る経緯と経過

１．経緯

可児市建設部都市計画課が坂戸地内の丘陵上に計画する運動公園造成事業に先だち、市教委は平成 18 年９月４日～ 10 月 19 日まで試掘調査を実施した。試掘調査は、古墳として確証のある坂戸上野古墳は行わず、坂戸上野遺跡を対象として実施された。試掘面積は約 120 ㎡である。

調査の結果､住居跡と炉跡が検出され､いくつかの区において石錘､磨製石斧､石鏃などの石製品と、神明式や加曾利ＥⅡ式、中富Ⅳ式の縄文土器が出土した。

平成 22 年度の運動公園整備事業の着工にともない、今回工事実施前に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

事務手続きの流れ

・平成 22 年４月 14 日付「埋蔵文化財の通知について」

発信者 可児市長 山田豊　　発信先 岐阜県教育委員会教育長 松川禮子

・平成 22 年 4 月 21 日付「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」
　発信者 岐阜県教育委員会教育長 松川禮子　　発信先 可児市長　山田豊
・平成 22 年 5 月 14 日付「埋蔵文化財発掘調査の報告について」
　発信者 可児市教育委員会教育長 井戸英彦　発信先 岐阜県教育委員会教育長 松川禮子
・平成 22 年 5 月 27 日付「埋蔵文化財の発掘調査について」
　発信者 岐阜県教育委員会教育長 松川禮子　　発信先 可児市教育委員会教育長 井戸英彦
・平成 22 年 8 月 20 日付「発掘調査終了報告書」
　発信者 可児市教育委員会教育長 井戸英彦　発信先 岐阜県教育委員会教育長 松川禮子

2．経過

発掘調査は準備を含め、平成 22 年 5 月 10 日～ 8 月 17 日まで実施した。調査区内の表土の掘削は重機を使用して 7 日間行い、その後は全て手掘りによって掘削した。

古墳部分には、露頭している天井石と想定される石材を考慮しつつ 4 方向にトレンチを設定した。石室部分は上面の石が出てくるまで全体的に掘り下げ、石室上面を検出した段階で 4 区に区割りし、掘り下げを行った。当初は、東側に開口している石室を想定していたが、西側に開口していることが判明した。掘削を進めていく中で、天井石を除く必要があったため、重機により天井石を除き、石室内の調査を進めた。動いていると思われる石材は除去し、床面まで掘り下げる中、石室の床面より 30cm 上の堆積土から玉が出土したため、その高さから床面までの土は水洗をかけ、玉類の検出を行っている。水洗によって、玉類のほかに一部鉄製品も出土している。床面直上の遺物は、検出状況の図面と写真をとり、取り上げを行った。掘削後に石室各壁の立面図と断面図を作成し、墳丘及び石室の断ち割りを行った。出土した鉄製品は、平成 22 年度に保存処理を行っている。

平成 18 年度に行った試掘調査で明らかになった縄文時代の住居跡（SB2）は、試掘後の埋め戻しで保護してある土納袋を除き、3 区の区割りを行い、調査をすすめた。住居跡の南部分については調査区の範囲外である。

表土除去後に明らかとなった縄文時代の住居跡（SB1）は、4 ヶ所に区割りし掘り下げた。

掘削個所では状況に応じて、土層断面図、平面図、遺物出土状況図を作成し、遺物は随時取り上げを行っている。

8 月 8 日には現地説明会を行い、地元を中心に 70 人程度の方に参加をいただいた。

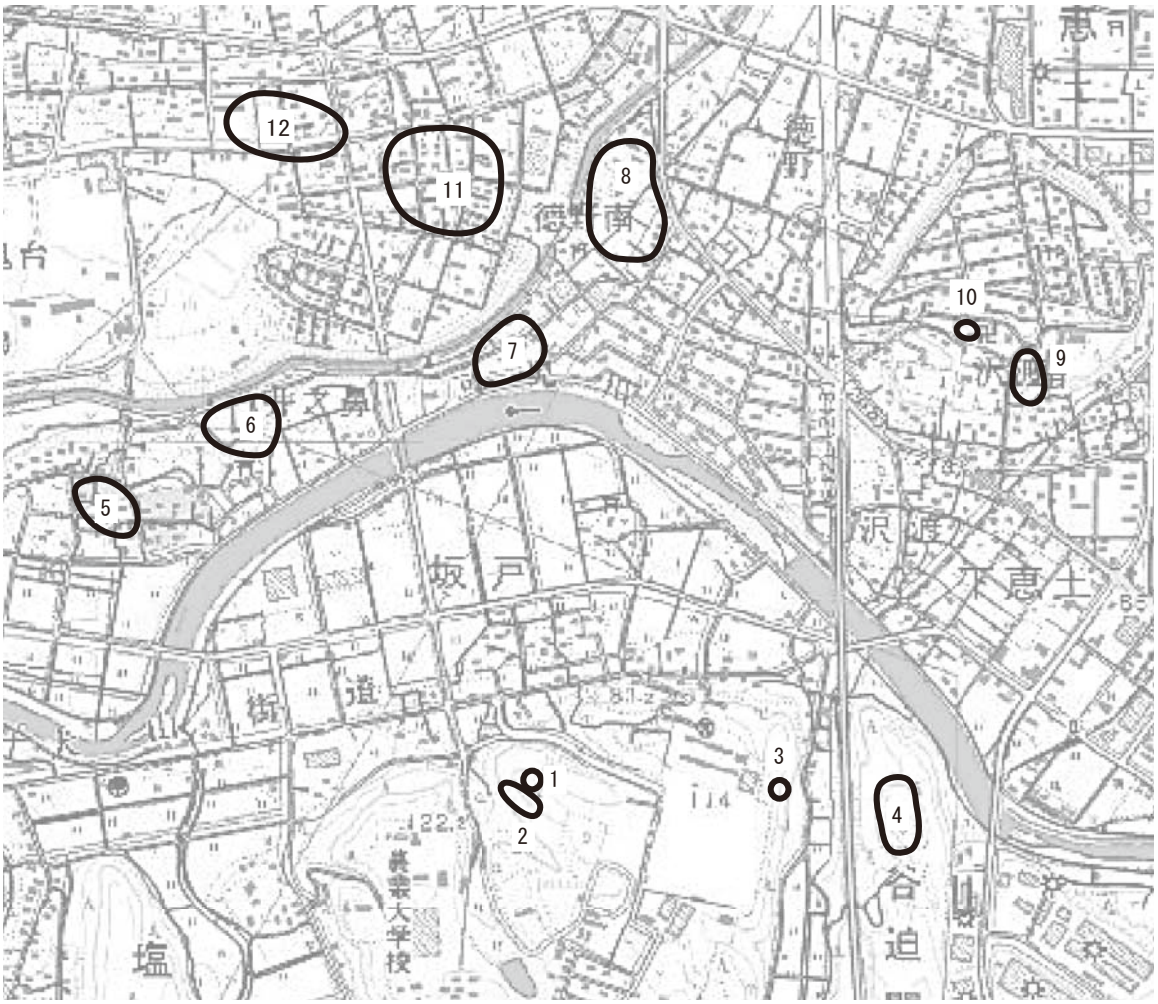


図１　周辺遺跡分布図（S=1/20000）

1　坂戸上野古墳	7　徳野遺跡
2　坂戸上野遺跡	8　徳野陣屋跡
3　坂戸上野2号墳	9　禅台寺山遺跡
4　山畑遺跡	10 平岡石見守の墓所
5　井之鼻遺跡	11 鳴子東遺跡
6　井之鼻B遺跡	12 鳴子西遺跡

表１　周辺遺跡一覧表

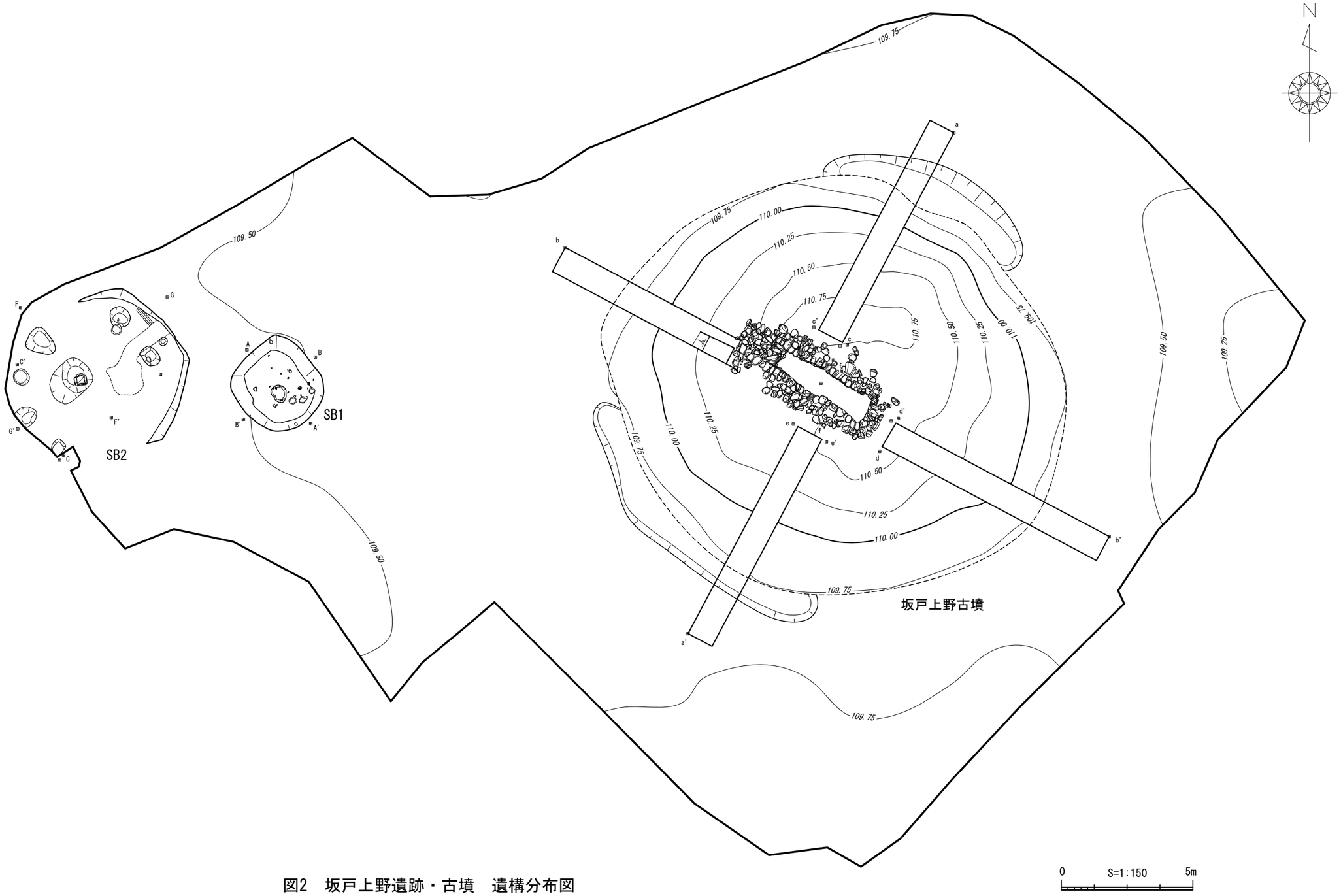


図2　坂戸上野遺跡・古墳　遺構分布図

第３章　坂戸上野遺跡

第１節　遺構

今回調査した周辺では平成 18 年度に 6000 ㎡を対象に試掘調査を行い、竪穴住居跡が 1 基検出されている。本調査としてこの部分を対象に、表土はぎを行ったところ、試掘調査で明らかとなった竪穴住居跡以外に竪穴建物跡が 1 基検出された。この建物跡を SB1、竪穴住居跡を SB2 とした。

SB1

3.3m × 3.1m の隅丸方形プランを呈し、覆土は厚さ約 20cm の堆積があり、暗黄褐色土を呈する。中央よりやや南西にピットがみられ、被熱した痕跡はみられない。同一面において、他の主柱が検出されなかったため、このピットが主柱と考えられる。床面は極めて不明瞭で、貼床の痕跡はみられなかった。径 20cm 程度の礫がみられるが、性格は明らかではない。側壁は緩やかに立ち上がり、SB2 とは異なる。プランの外周縁にもピットは検出されず、一本柱で上屋が円錐形構造の建物が考えられ、貯蔵施設のような用途も推定できる。出土遺物から縄文時代中期後半に所属するものと考えられる。

SB2

SB1 の南側に位置する。ほぼ円形プランとみることができ、南西側は後世の削平により不明瞭であり、南東部分は木の根による撹乱を受けている。

覆土は厚さ 40 ～ 60cm であり、周溝は北東側で一部検出された。これは壁の直下ではなく若干内側であり、長さ 80cm ほどが残存している。床面は一部北側で残存しており、厚さは 5 ～ 8cm である。主柱は P1 ～ P3 が見込まれ、深さは 20cm 程度である。他の P4 ～ 8 は性格は不明である。

炉跡は方形に石囲いし、細長の石材が使用されている。その中心部には土器を据える台石のように平らな石材が置かれていた。炉の上面の堆積土と構築面には土質の差がみられなかったが、9 層のように一定のしまりのある土がみられるため、本来はこのレベルで炉の構築面があった可能性がある。最終的な石囲い炉は以前あった SK2 を埋めた後に構築している。12 層の底面は赤く焼けているため、現在の炉跡以前に別の炉があり、12 層の面で炉を構築したと考えられる。10 層の底面（12 層上面）では被熱をした土がみられず、石材にも赤色の被熱痕がみられないため、この炉の使用は短期間であろう。周辺には被熱を受けた石材の散在がみられ、旧炉に使用していた石材の一部と思われる。

炉のプランを変更した際に、住居の規模なども変更している可能性が考えられ、P4 ～ P8 のどれかは旧住居の柱穴の可能性も考えられる。

神明式、中富式、加曽利ＥⅡ式の縄文土器が出土しており、縄文時代中期後半に所属するものと考えられる。

第２節　遺物

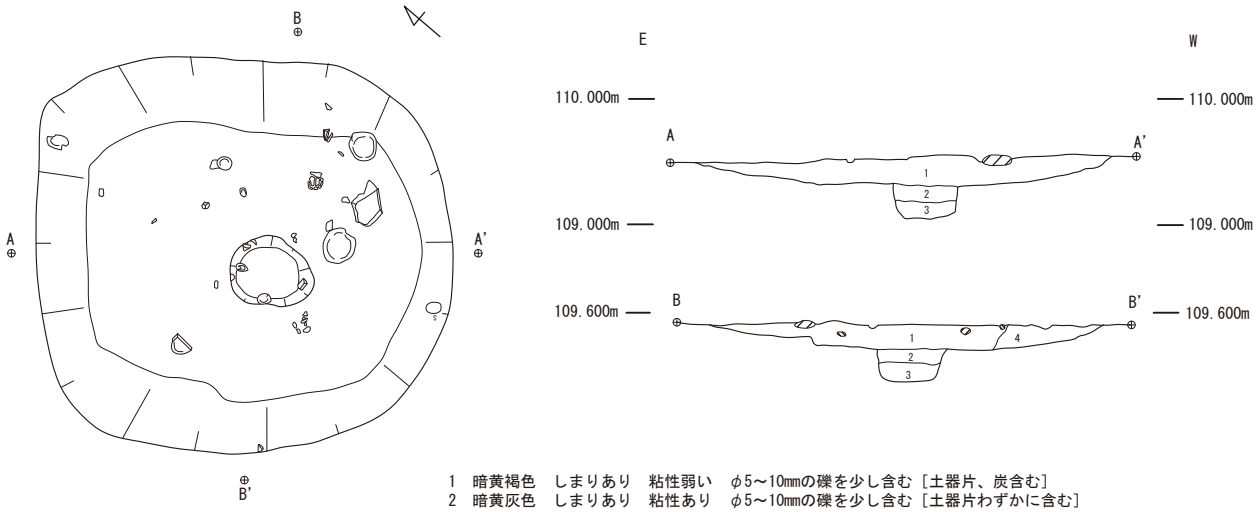
縄文時代の住居に伴う遺物は、土器と石器が出土している。土器の破片数は総数で約 4000 点出土しており、土器は 32 点を図化した。石器は約 400 点が出土しており、そのうち道具は 83 点（石鏃 7 点、石錐 2 点、削器 2 点、楔形石器 11 点、打製石斧 10 点、磨製石斧 2 点、石錘 18 点、磨石 11 点、敲石 8 点、凹石 2 点、石皿 5 点、不明 5 点）であり 12 点を図化した。

出土した土器の多くは深鉢形土器である。1 は中富Ⅳ式にあたり、口縁部は内傾し凹線がみられる。2 は中富式の範疇であり、口縁部に二条の凹線がめぐる。

3 ～ 21 は神明式と考えられ、3・5 は、方形区画の中に櫛描条線文が施される。4 は、方形区画の中に 3 や 5 よりも細い櫛描条線文がわずかにみられる。7 は、沈線による区画の中に櫛描条線文がみられる。8 は、円棒状工具を用いた刺突文が口縁部に巡る。9 は、胴部に唐草文を配し、一部に櫛描条線文がみられる。10 は、隆帯によって上下の文様が区別され、上部は縦位の凹線文、胴部に隆帯による唐草文の区画の中に櫛描条線文が施される。11 は、横位の凹線による楕円形区画の中に櫛描条線文が施される。12 は、外反する折り返し口縁の下に、櫛描条線文が施した楕円形区画の文様帯がみられる。13 は、凹線により渦巻文と縦位の U 字形状の区画文がみられ、渦巻文の区画内にはヘラ状工具による条線文が施される。14 は橋状把手がみられ、楕円形区画の中に櫛描条線文が施される。15・17・18 は底部及び脚台部であり、18 は内面に炭化した木質の痕跡がみられる。16 は、口縁部文様帯が方形区画と橋状把手で表現され、突帯にはヘラ状工具による条線文がみられる。19・20・21 は、口縁部文様帯が方形区画と橋状把手で表現される。19 は、文様帯にはヘラ状工具による施文がみられ、棒描凹線による唐草文が描かれ、縄文を地文とする。22 は、胴部全体に縄文を施し、神明式または加曽利ＥⅡ式と考えられる。

23 ～ 27 は、加曽利ＥⅡ式と考えられる。24 は、棒描凹線による方形区画の中に櫛描条線文を施す。25 は、隆帯による方形区画で、縄文を地文とする。26 は、隆帯による区画はみられるが、他の施文は磨滅のためかみられない。27 は、渦巻文と楕円区画文を口縁部文様帯とし、地文に櫛描沈線文が施される。28 は、口縁部に櫛描沈線文が巡る。29 は、隆帯による区画はみられるが、文様は磨滅している。30 は、棒描凹線文の区画の中に櫛描条線文がみられ、神明式の可能性が考えられる。31 は、胴部の張り出し部分に縄文の地文が施される。32 は深鉢形土器の底部である。

33 はチャート製の石鏃である。基部形態は凹基無茎式で、長さ 1.3cm と小形である。34・35 は下呂石製の石錐である。両者とも柄は作り出されておらず、断面は三角形および菱形で、平面形状は最大幅が器体中央部付近にある菱形を呈する。36 はサヌカイト製の削器である。幅広の剥片を素材とし、素材の末端辺に裏面から平坦な剥離を施し刃部を形成している。37 はホルンフェルス製の打製石斧である。両側縁が平行する短冊形を呈する。39 ～ 41 は石錘で、39 が凝灰岩、40・41 がホルンフェルスである。いずれも扁平な円礫を素材とし、両極打撃により礫長軸の両端に抉り部が作り出されている。38 は蛇紋岩製の磨製石斧である。両側面が磨き出された定角式であるが、風化のため研磨痕は図の右側面の一部にしか残っていない。また刃部には、衝撃剥離と思われる剥離痕がみられる。42・43 は濃飛流紋岩製の磨石である。42 は楕円形の円礫を素材とし、43 はやや扁平な円礫を素材としている。両者とも全面に研磨痕がみられるが、表裏面や側面の一部に敲打痕とおもわれる凹みもみられる。また 42 には被熱痕もみられる。44 は濃飛流紋岩製の石皿の破片である。全体的に被熱痕がみられる。



1　暗黄褐色　しまりあり　粘性弱い　φ5～10mmの礫を少し含む［土器片、炭含む］
2　暗黄灰色　しまりあり　粘性あり　φ5～10mmの礫を少し含む［土器片わずかに含む］
3　暗黄灰色　しまりあり　粘性あり　φ5～10mmの礫を少し含む［土器片含まない。上層より地山の土混じる］
4　黄褐色　　しまりあり　粘性あり　φ5～10mmの礫を少し含む［土器片含む］

図３　SB1 実測図

0　S=1:60　2m

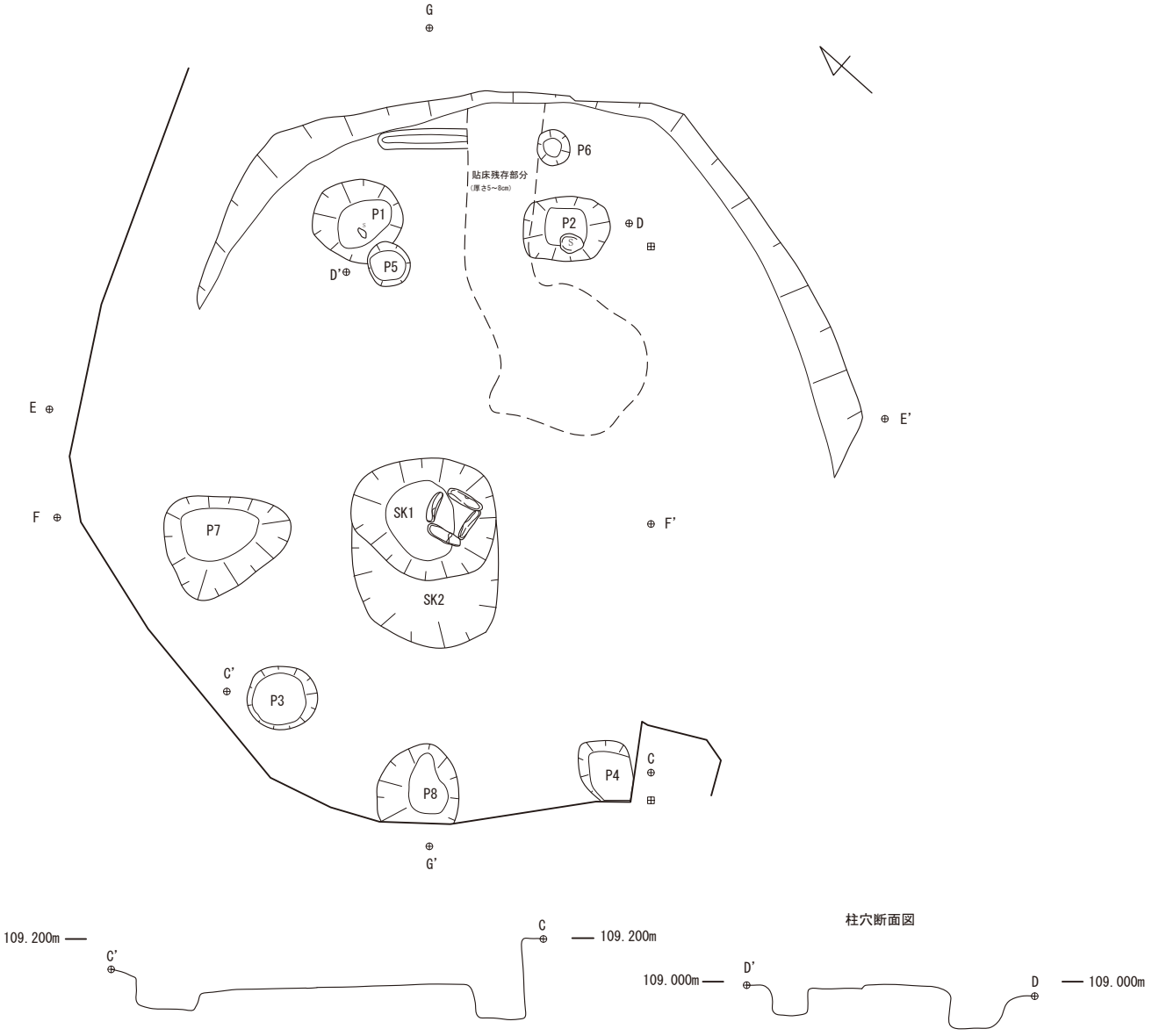
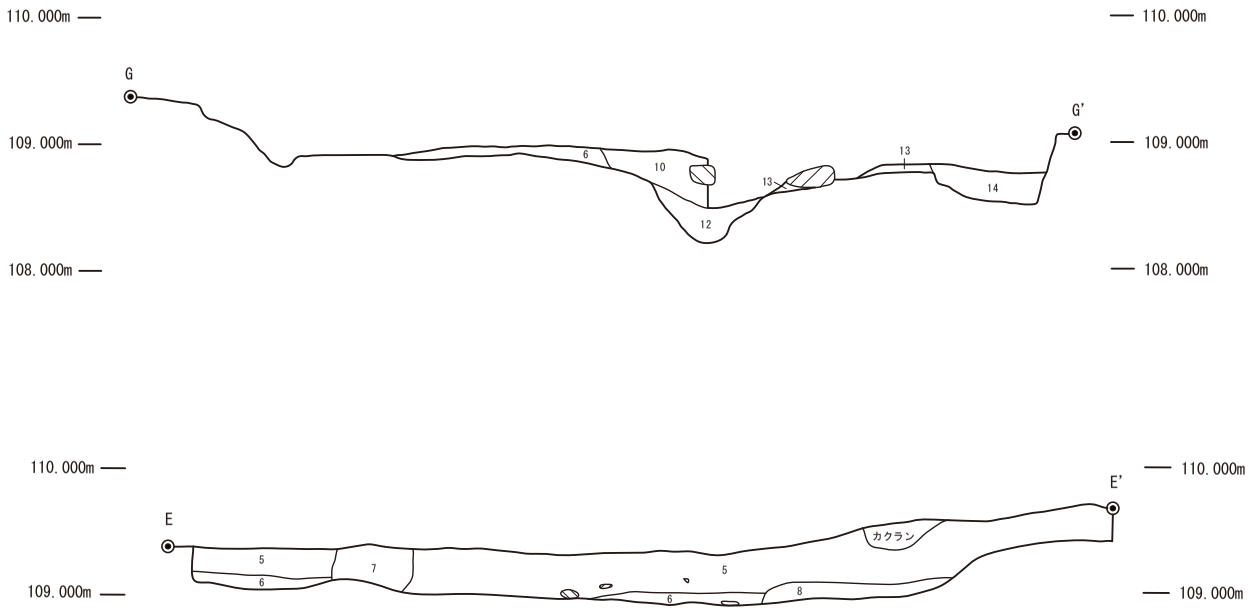
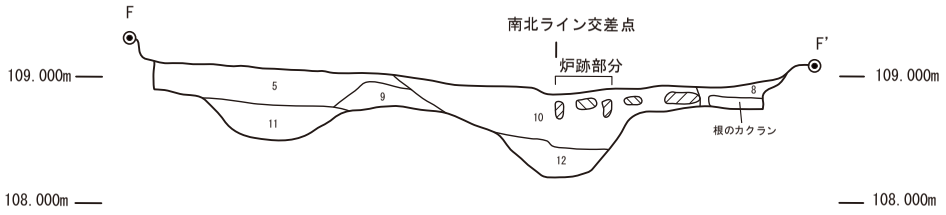


図4　SB2　実測図

0　S=1:60　2m





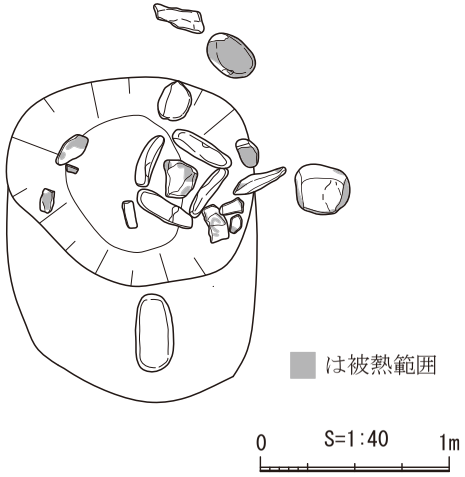


図５　SB2　炉跡と石材検出状況

5	黄褐色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～10mmの礫を少量含む〔土器片を含む堆積土〕
6	黄褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5～10mmの礫を少量含む〔5よりもやや色が暗い。土器片を含む堆積土〕
7	暗褐色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～10mmの礫を含む〔堆積土。カクランの可能性あり〕
8	暗黄褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5mm前後の礫を少量含む〔土器片を含む堆積土〕
9	黄褐色	しまりあり	粘性あり	Φ10～20mmの礫を多く含む〔炉築造時の肩か〕
10	暗灰褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5mm前後の礫を少量含む〔炉築造時に伴う層。カクランを受けて土は混じる〕
11	黄褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5～20mmの礫を含む〔土器片を含む土坑の埋土〕
12	暗黄褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5～30mmの礫を多く含む〔底は赤色被熱している。炉構築以前の堆積土〕
13	暗褐色	しまり強い	粘性あり	Φ5mm前後の礫を含む〔土器片を含む貼床土〕
14	黄褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5～20mmの礫を多く含む〔土器片を含む土坑の埋土〕

0　S=1:60　2m

図６　SB2 土層断面図

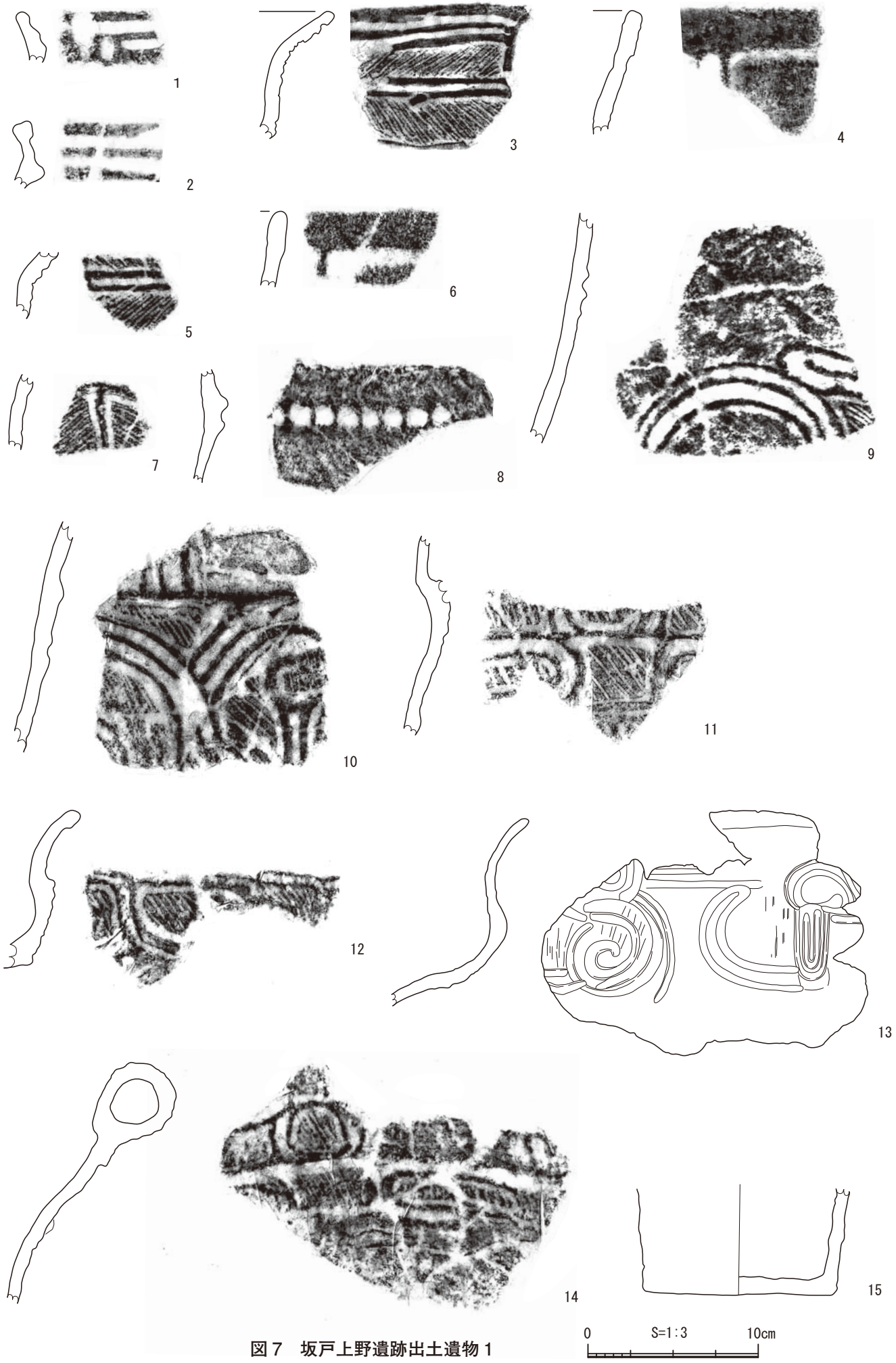


図７　坂戸上野遺跡出土遺物１

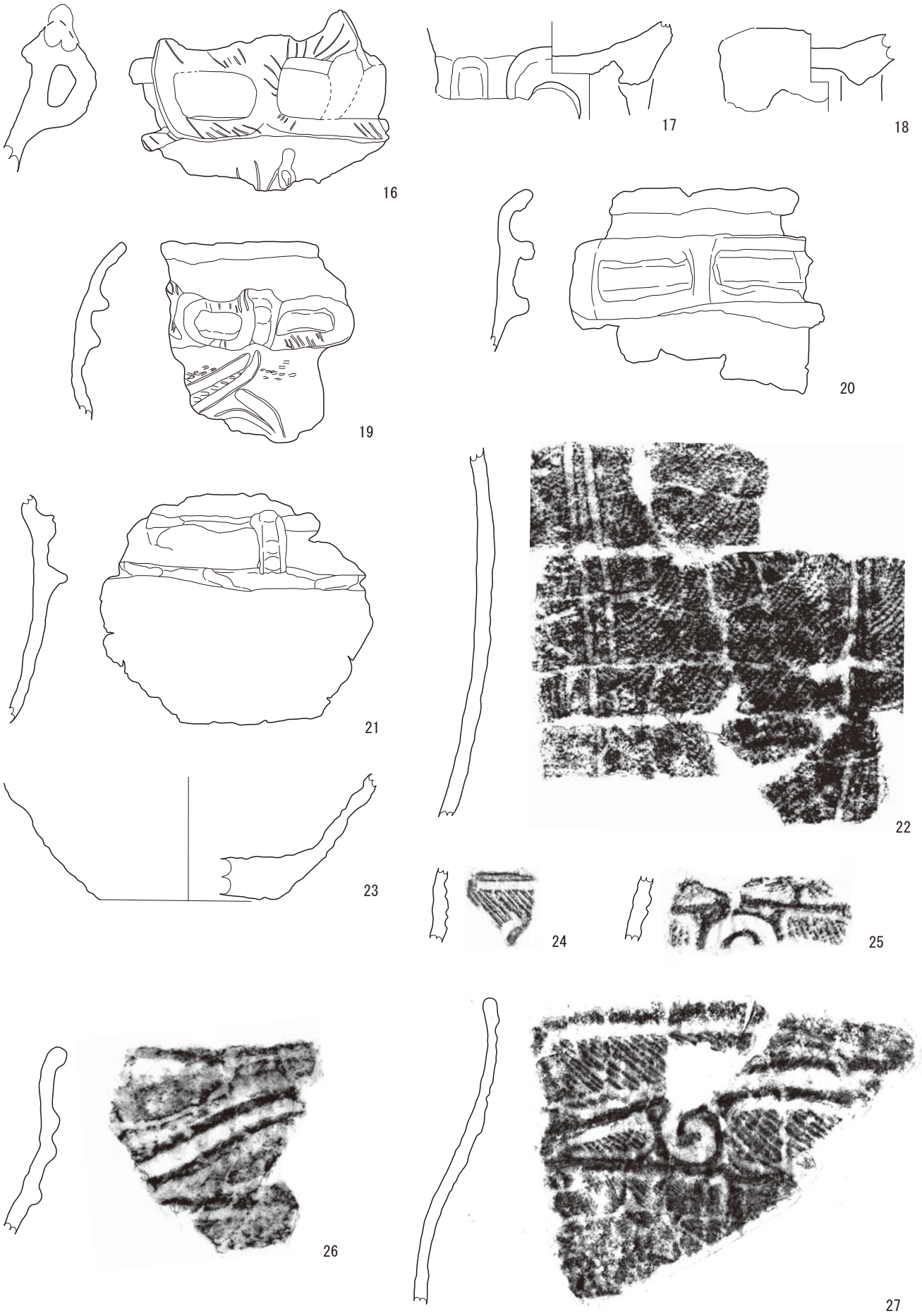
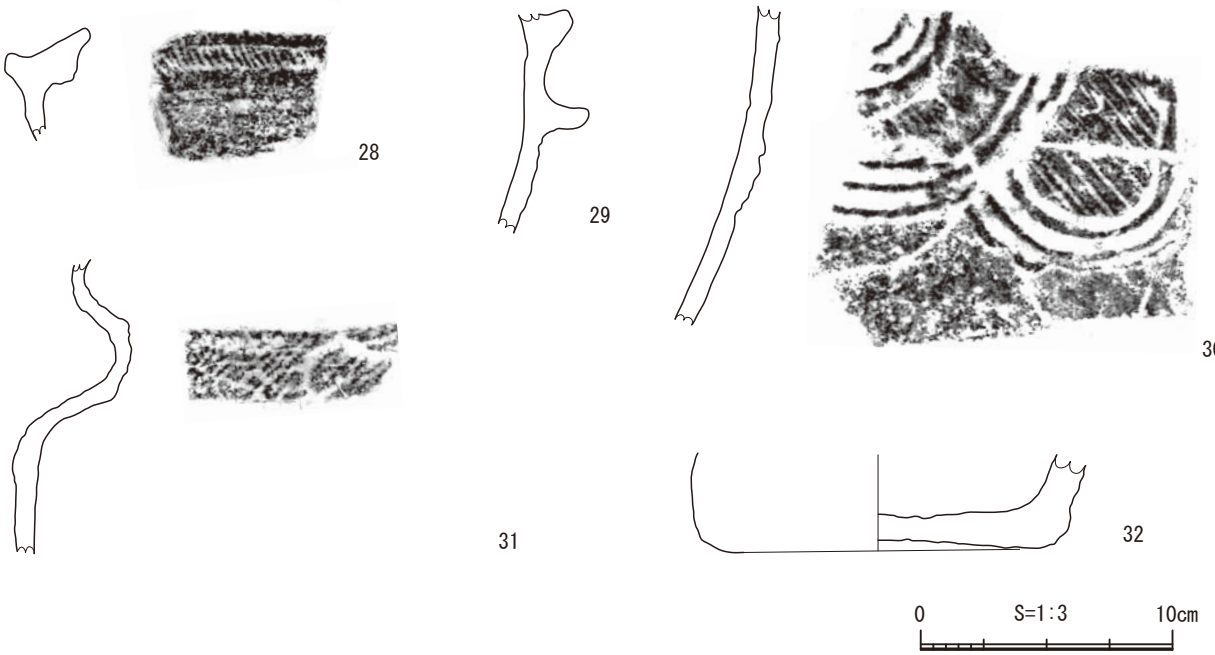


図８　坂戸上野遺跡出土遺物２



番号	写真	調査区・遺構	型式	器形	部位	器高	その他	胎土	色調（外面）	備考
1	1	SB2	中富Ⅳ	深鉢形土器	口縁部	(3.0)		粗密	赤褐色	
2	2	SB2	中富	深鉢形土器	口縁部	(3.7)		粗密	赤褐色	
3	3	SB2	神明	深鉢形土器	口縁部～頸部	(7.5)		粗密	褐色	
4		SB2	神明	深鉢形土器	口縁部～胴部	(7.2)		粗密	褐色	
5		SB2	神明	深鉢形土器	頸部	(3.9)		粗密	暗褐色	
6		SB2	神明	深鉢形土器	口縁部	(4.1)		粗密	暗褐色	
7		SB2	神明	深鉢形土器	口縁部	(4.3)		粗密	暗褐色	
8	8	SB2	神明	深鉢形土器	胴部	(6.4)		粗密	黄白色	
9	9	SB2	曽利Ⅲ	深鉢形土器	胴部	(13.4)		粗密	褐色	
10	10	SB2	神明（曽利Ⅲ）	深鉢形土器	胴部	(13.5)		粗密	褐色	
11		SB2	神明	深鉢形土器	胴部	(11.6)		粗密	赤褐色	
12		SB2	神明	深鉢形土器	口縁部	(9.2)		粗密	暗褐色	
13	13	SB2	神明	深鉢形土器	口縁部～胴部	(11.0)		粗密	黄白色	
14	14	SB2	神明	深鉢形土器	口縁部～胴部	(14.0)		粗密	褐色	
15		SB2	神明	深鉢形土器	底部	(6.5)	底部径10.2	粗密	赤褐色	
16	16	SB2	神明	深鉢形土器	口縁部	(8.1)		粗密	褐色	
17	17	SB2	神明	深鉢形土器	底部	(3.9)		粗密	赤褐色	
18	18	SB2	神明	深鉢形土器	底部	(4.2)		粗密	褐色	木質の痕跡が残る
19	19	SB2	神明	深鉢形土器	口縁部～胴部	(10.0)		粗密	暗褐色	
20	20	SB2	神明	深鉢形土器	口縁部～胴部	(11.2)		粗密	褐色	
21		SB2	神明	深鉢形土器	胴部	(12.9)		粗密	赤褐色	
22		SB2	神明	深鉢形土器	胴部	(20.5)		粗密	褐色	
23		SB2	神明か加曽利EⅡ	深鉢形土器	底部	(4.9)		粗密	褐色	
24		SB2	加曽利EⅡ	深鉢形土器	口縁部	(4.2)		粗密	暗褐色	
25		SB2	加曽利EⅡ	深鉢形土器	口縁部	(3.8)		粗密	黄褐色	
26		SB2	加曽利EⅡ	深鉢形土器	口縁部～胴部	(10.5)		粗密	灰褐色	
27	27	SB2	加曽利EⅡ	深鉢形土器	口縁部～胴部	(13.5)		粗密	褐色	
28		SB2	—	深鉢形土器	口縁部	(4.4)		粗密	黄白色	
29		SB2	—	深鉢形土器	口縁部	(8.7)		粗密	褐色	文様磨滅
30	30	SB2	神明？	深鉢形土器	胴部	(12.8)		粗密	褐色	
31	31	SB2	神明？	深鉢形土器	頸部～胴部	(11.6)	胴部径（19.8）	粗密	褐色	
32		SB2	—	深鉢形土器	底部	(2.7)		粗密	褐色	

図９　坂戸上野遺跡出土遺物３

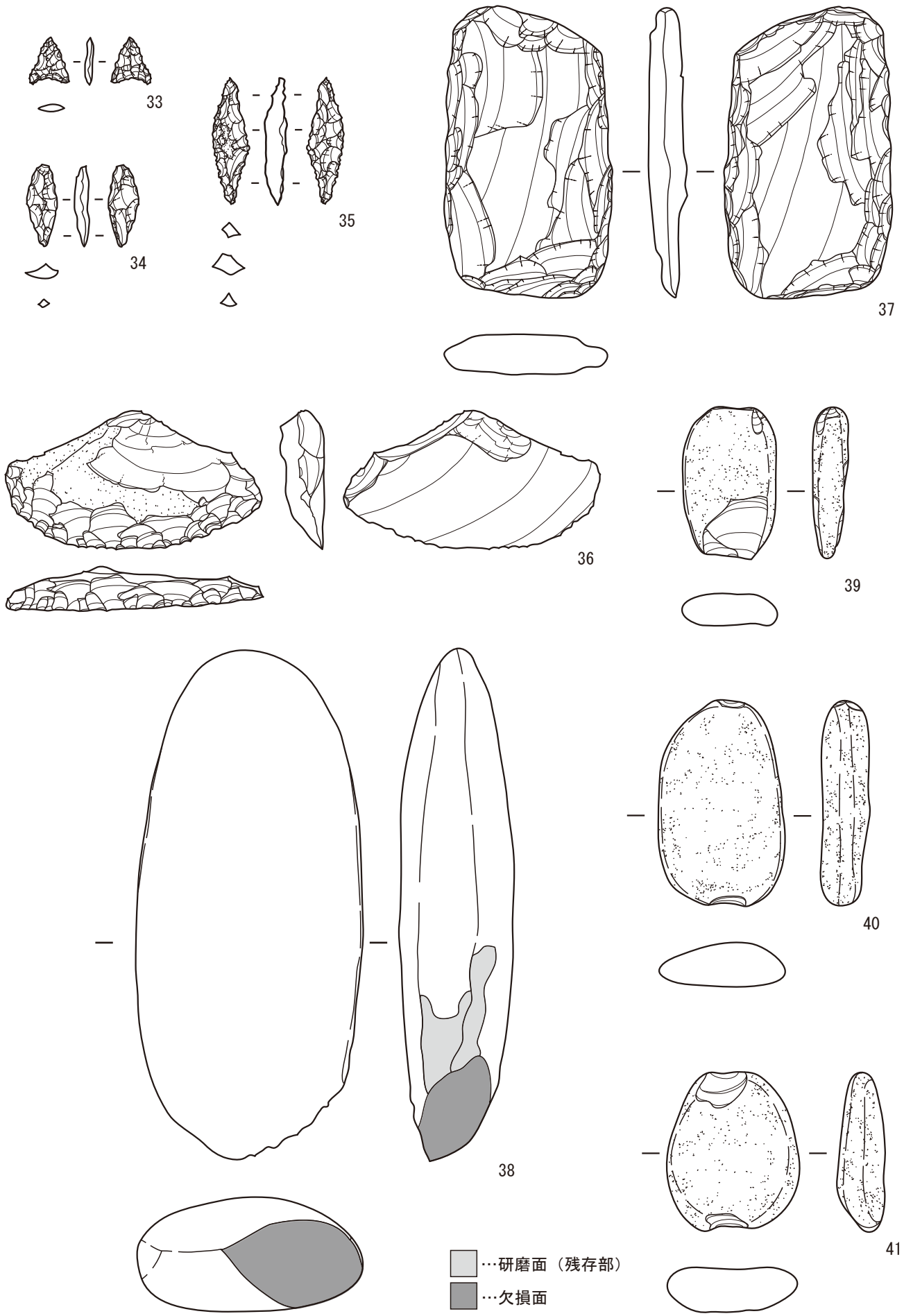


図 10　坂戸上野遺跡出土遺物４

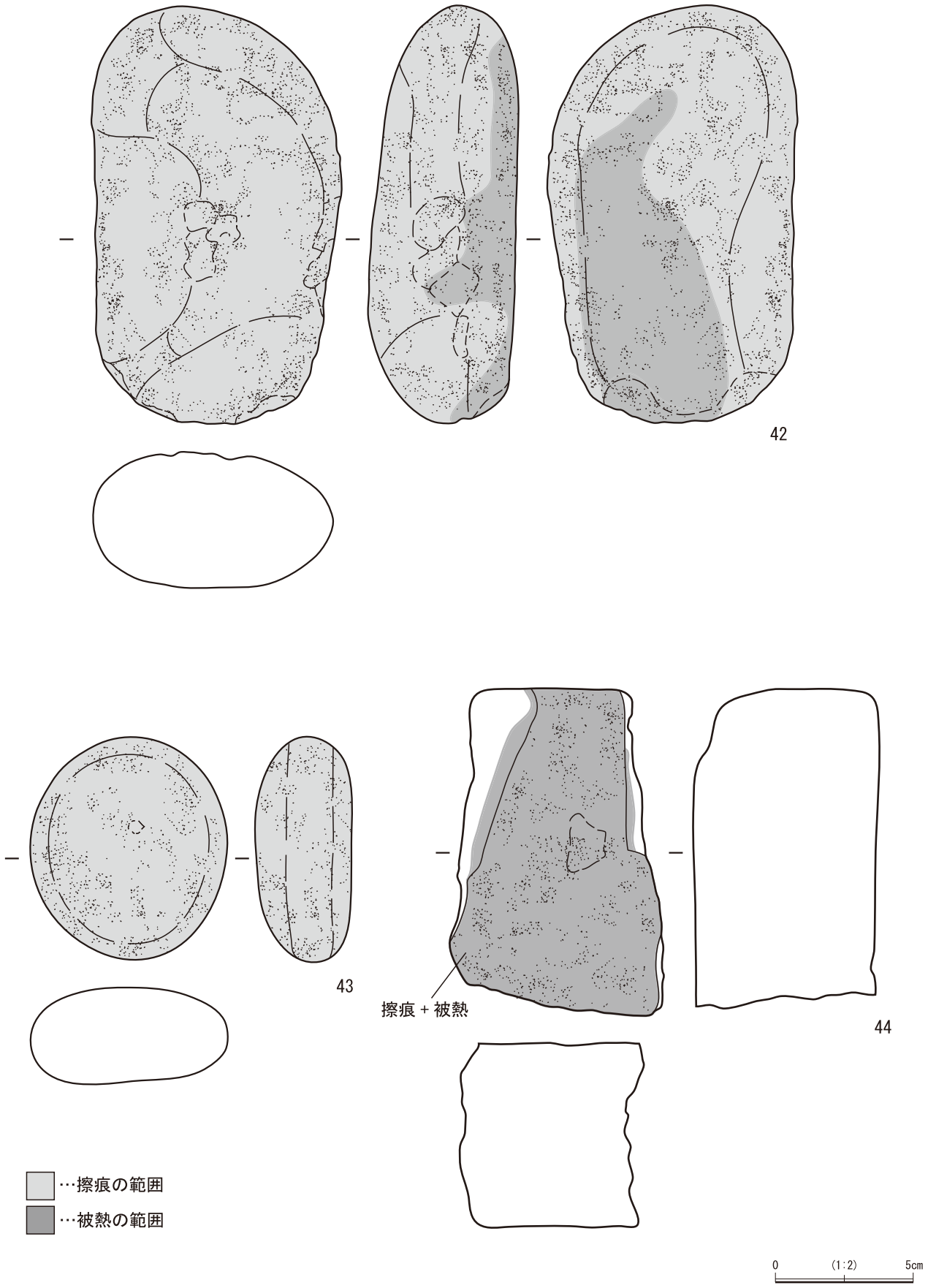


図 11　坂戸上野遺跡出土遺物５

番号	写真	調査区・遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
33	33	古墳西トレンチ堆積土	石鏃	1.3	1.1	0.2	0.3	チャート
34	34	SB1 堆積土	石錐	2.3	1.0	0.4	0.8	下呂石
35	35	古墳表土	石錐	3.7	1.1	0.7	2.2	下呂石
36	36	古墳玄室内	削器	7.4	4.0	1.0	32.7	サヌカイト
37	37	古墳東トレンチ堆積土	打製石斧	8.1	4.7	1.1	70.0	ホルンフェルス
38	38	SB2 堆積土	磨製石斧	14.4	6.4	3.5	517.6	蛇紋岩
39	39	SB2 堆積土	石錘	4.3	2.2	0.9	18.0	凝灰岩
40	40	SB2 堆積土	石錘	5.8	3.6	1.2	41.2	ホルンフェルス
41	41	SB2 堆積土	石錘	4.5	3.7	1.3	32.0	ホルンフェルス
42	42	SB2 堆積土	磨石	14.9	8.9	4.9	1025.0	濃飛流紋岩
43	43	SB2 堆積土	磨石	8.1	7.1	3.5	274.8	濃飛流紋岩
44	44	SB2 堆積土	石皿	(11.6)	(6.7)	6.6	1046.0	濃飛流紋岩

表２　坂戸上野遺跡石器観察表

第３節　まとめ

坂戸上野遺跡は、調査により住居跡１基と倉庫建物１基が検出され、東側に広がる平坦面では住居の跡が検出されなかった。出土した遺物から、市内では川合宮之脇遺跡Ｂ地点と同時期である。河川に近い平坦な場所に立地する川合宮之脇遺跡に比べ、坂戸上野遺跡は河川からも離れ、丘陵の突端に位置している。試掘による結果に検出もれがないと仮定すれば、何らかの目的による短期的な単世帯居住域である可能性も考えられるが、ほぼ備わった土器や石器をみると、その性格は不明と言わざるを得ない。

第４章　坂戸上野古墳

第１節　遺構

墳丘規模

墳丘の規模は、南北で約 14.6m、東西で約 18.4m を測る。墳形は、平面真円ではなく、東西に長い楕円形である。高さは、残存高約 1.0m、天井石が残っていた部分から本来の高さを推定すると、墳丘の高さは 1.4m 以上となる。葺石など外表施設は確認できなかった。墳丘上には、稲荷社の祠が祀られており、露出した石室の天井石が祠の台石として使用されていた。

周溝

周溝は四周せず、南北のみにみられる。南側は長さ約 11.4m、北側は長さ約 8.3m を測り、周溝幅は 1.6 ～ 2.2m、深さは 0.2m 程度である。周溝の覆土は、暗灰黄色砂質土である。墳丘と同様に、周溝も削平（改変）にあっている可能性がある。

盛土

墳丘の基底面は、地山を標高 109.8m あたりで水平に整地した後に盛土が行われ、各トレンチの分層状況から３段階の構築が想定される。一次構築面は 110.0m 付近で、古墳の石材の基底部から２～３段目に対応する。110.4m あたりが２次構築面となり、それより上が３次構築としてなされたのであろう。盛土の方法は、ほぼ水平な盛り上げであり、叩き締められたのか良くしまっている。ブロック状にまとまった盛土の単位や互層状になっている部分はみられない。盛土の中には、須恵器片や縄文土器片、石器片も含まれていた。

墳丘東側には、墳丘上にあった稲荷社への道を造成した 12 層がみられる。墳丘南側は墳丘の上面に築かれていた稲荷社の正面にあたるため、墳丘上の稲荷社を造営する際に側壁の石材をいくらか使用したと考えられ、盛土も削られている。

石室の構築は、土層の状況から盛土構築時に同時に行っていると考えられ、構築面と石室の石材の高さがほぼ同様である。石室側には裏込めとして、石と土が用いられる。裏込土は、特別なものではなく、墳丘盛土と同様の土が用いられ、土質の違いの判断は難しい。裏込石についても同様である。

埋葬施設

埋葬施設は竪穴系横口式石室であり、石室の開口方向は北西である。石材は河岸段丘に含まれる角のとれた人頭大を超える石（20 ～ 50cm）を使用している。石材の間には、部分的に拳大程度の小円礫を詰めている。

天井石は２石残存しているが、原位置からはやや動いている。天井石が除かれた部分から石室内に土が流入したと考えられ、天井石の下面まで堆積土がみられた。古墳からやや離れた部分にも天

井石と思われる石材がみられ、石材は全てチャートである。

石室の長さは、主軸長で 5.5m を測る。玄室長は 3.7m、玄室幅は 1.0m、側壁が最も残存している部分で、玄室高は約 1.2m を測る。玄門部には、右側壁にやや弱く張り出した袖がみられるが、基底石ではみられない。平面形は奥壁、側壁ともに胴張りはみられず直線的であり、奥壁付近でやや広がる。石室の立面形は、側壁、奥壁ともに直線的であり、持ち送りはみられない。

奥壁は、内側へ平坦に割れた面を向け中央に配し、基底石には扁平な石材を長手積みに置いている。

側壁は 2 ～ 8 段がみられ、天井石の残っている場所から想定すると、8 段程度の石材を積んでいたと考えられる。側壁は、段を意識して積んでいることがみてとれ、奥壁とも列はそろう。左側壁には、基底石に扁平な石材が長手積みに用いられるほか、中央付近では枕石を使用している。左側壁と奥壁の隅部分は丸みをもつが、右側壁と奥壁の隅部分は、床面より 5 段目部分のみに丸みをもたせている。右側壁は、左側壁に比べやや大振りな石材が用いられる。

羨道部

羨道部長は 1.8m を測る。玄門部分は、本来は段を形成する框石があったと思われるが、閉塞石との区別が困難であったため、調査で残すことができなかった。閉塞している状況と礫床から判断すると、玄門部分は幅 0.7m、玄門高約 1.0m を測る。玄室と羨道の境では、側壁には石が縦に並ぶなど特別は積み方をしている部分はみられないが、基底石にやや大きめの石材が用いられている。

閉塞石は、石室と同様に角のとれた人頭大を超える石材を使用し、玄室側では下 2 段を除き 4 段の石積みがみられる。玄室側は規則正しく積まれているが、それ以外は褐色土とともに石材を乱雑に積んでいる。閉塞石の下から H-61 号窯式期の杯蓋（1）が出土しており、これより後の追葬時の混入と考えられる。

石室床面

石室は、地山を掘り込んで造られている。床面は地山面をならし、その上に暗黄灰色砂質土を敷き固めて整地している。暗黄灰色砂質土の上にはほぼ水平に礫床を敷く。礫床は 2 ～ 20cm のチャートや濃飛流紋岩が用いられる。石室の中心付近には小さめの石を、側壁及び奥壁付近には大きめの石を配している。部分的に礫床がない部分がみられるが、床面を削るような掘りこみはみられない。遺物の出土状況から盗掘にあっていると考えられるため、本来は全面に敷かれていた礫床が盗掘の際にカクランされたと考えられる。土層断面や床面に、棺の痕跡はみられなかった。

遺物出土状況

遺物は、須恵器、玉類、鉄製品が出土している。多くが礫床面及びその直上から出土しているが、原位置を保っている遺物は少ないと考えられる。鉄製品はまとまっておらず、鉄鏃の切先の方向も統一性はみられない。また、鉄鉾も石突とは離れて出土している。

須恵器の杯身・杯蓋の多くは石室の北西隅にかたまっており、片付けによるものと考えられる。7 と 13 は同位置から出土しているが、型式的に時期差がありセット関係にはない。3 と 14 は同位置で出土し、型式的に時期差はなくセット関係にあると考えられる。セットの可能性があるのは 5

と 15、7 と 18 である。後述する須恵器の編年観から、3 回以上の追葬が想定できる。出土状況から、石室の南東隅にみられる短頸壺は原位置を保っている可能性が高い。濃尾地方を中心にみられる、奥壁角の小型甕の副葬と共通した風習・儀礼との可能性も考えられる。短頸壺に蓋はみられなかった。

玉類は散在した出土状況であるが、棺があったと想定される位置より外側で出土している。また、玉類は水洗により見つかったものもあり、奥壁付近の堆積土からはガラス玉が 5 点、石室中央付近ではガラス玉 8 点、算盤玉 1 点、切子玉 1 点、閉塞石付近でガラス玉が 1 点出土している。

須恵器が棺外に置かれたものと仮定するならば、棺の寸法は長さ約 2.1m と想定できる。頭位は奥壁側の東向きが推定される。

図 12　墳丘南北断面図（石室横断）

0　S=1:80　2m

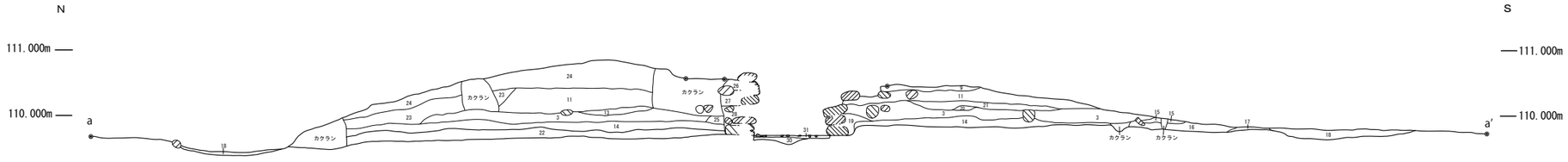
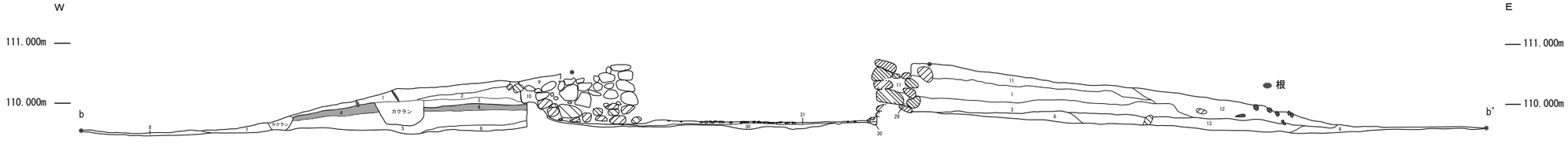


図 13　墳丘東西断面図（石室縦断）

0　S=1:80　2m



1	褐色	しまりあり	粘性弱い	Φ5mm前後の礫を含む	〔墳丘盛土〕
2	明褐色	しまりあり	粘性弱い	Φ5mm前後の礫を含む	〔墳丘盛土〕
3	暗灰色	しまり弱い	粘性あり	Φ5mm前後の礫を少量含む	〔墳丘盛土〕
4	暗褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5mm前後の礫を少量含む	〔地山。上面が羨道床面〕
5	黄褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5mm前後の礫を少量含む	〔地山〕
6	黄褐色	しまり強い	粘性弱い	Φ5mm前後の礫を多く含む	〔地山〕
7	黄白色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～10mmの礫を多く含む	〔墳丘盛土〕
8	黄白色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～10mmの礫を多く含む	〔地山〕
9	暗黄褐色	しまり強い	粘性弱い	Φ5～20mmの礫を少量含む	〔稲荷の造成土〕
10	暗褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5mm前後の礫を少量含む	〔石室構築時の充填土〕
11	褐色	しまりあり	粘性弱い	Φ5mm前後の礫を少量含む	〔墳丘盛土〕
12	暗褐色	しまり弱い	粘性弱い	Φ5～20mmの礫を含む	〔五輪塔が入る後世の堆積土。稲荷社の道の造成か〕
13	暗褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5～10mmの礫を含む	〔墳丘盛土〕
14	暗褐色	しまり弱い	粘性あり	Φ5～10mmの礫を含む	〔墳丘盛土。部分的に地山の土が混じる〕
15	黄褐色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～10mmの礫を少量含む	〔墳丘盛土〕
16	褐色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～10mmの礫を少量含む	〔墳丘盛土〕
17	暗褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5mm前後の礫を含む	〔墳丘盛土〕
18	暗灰黄色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～10mmの礫を少量含む	〔周濠埋土〕
19	暗褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5mm前後の礫を含む	〔石室の裏込土〕
20	灰褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5～10mmの礫を少量含む	〔墳丘盛土〕
21	暗褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5mm前後の礫を含む	〔墳丘盛土〕
22	黄褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5～10mmの礫を少量含む	〔墳丘構築以前の地山〕
23	暗灰色	しまり弱い	粘性弱い	Φ5～10mmの礫を少量含む	〔墳丘盛土〕
24	黄灰色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～10mmの礫を少量含む	〔墳丘盛土〕
25	黒色	しまり強い	粘性弱い	Φ5mm前後の礫を含む	〔石室の裏込土〕
26	黄白色	しまりあり	粘性弱い	Φ5mm前後の礫をわずかに含む	〔石室の裏込土〕
27	暗褐色	しまり弱い	粘性あり	Φ5mm前後の礫をわずかに含む	〔石室の裏込土。部分的に地山の土が混じる〕
28	暗褐色	しまり弱い	粘性あり	Φ5mm前後の礫をわずかに含む	〔石室の裏込土。27と比べるとやや色が暗く、混じりがない〕
29	暗黄褐色	しまりあり	粘性あり	Φ5～10mmの礫を含む	〔石室の裏込土〕
30	〔色調は様々、地山の２次堆積層〕				
31	暗黄灰色	しまりあり	粘性あり	Φ5mm前後の礫をわずかに含む	〔床面整地土〕
32	黄褐色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～20mmの礫を少量含む	〔堆積土〕
33	暗褐色	しまりあり	粘性弱い	Φ5～20mmの礫を少量含む	〔炭、須恵器片を含む堆積土〕
34	暗褐色	しまり弱い	粘性弱い	Φ5～20mmの礫を少量含む	〔炭を含む堆積土〕
35	暗黄褐色	しまり弱い	粘性あり	Φ5～10mmの礫を少量含む	〔管玉、鉄製品を含む堆積土〕

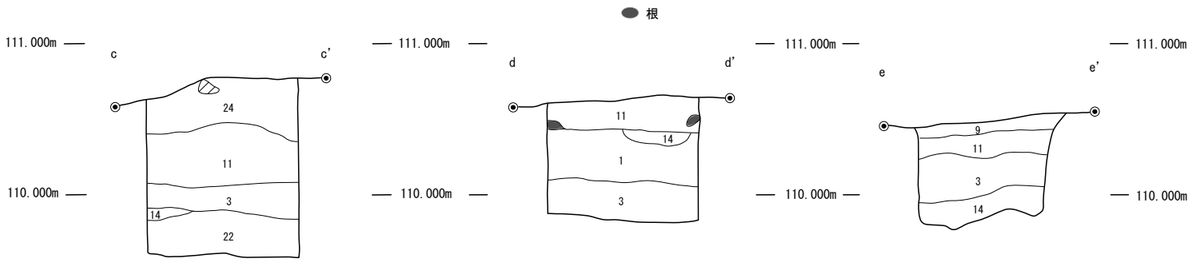


図 14　墳丘断面図

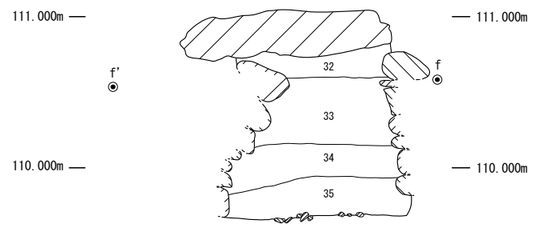


図 15　天井石堆積土断面図

0　S=1:40　1m

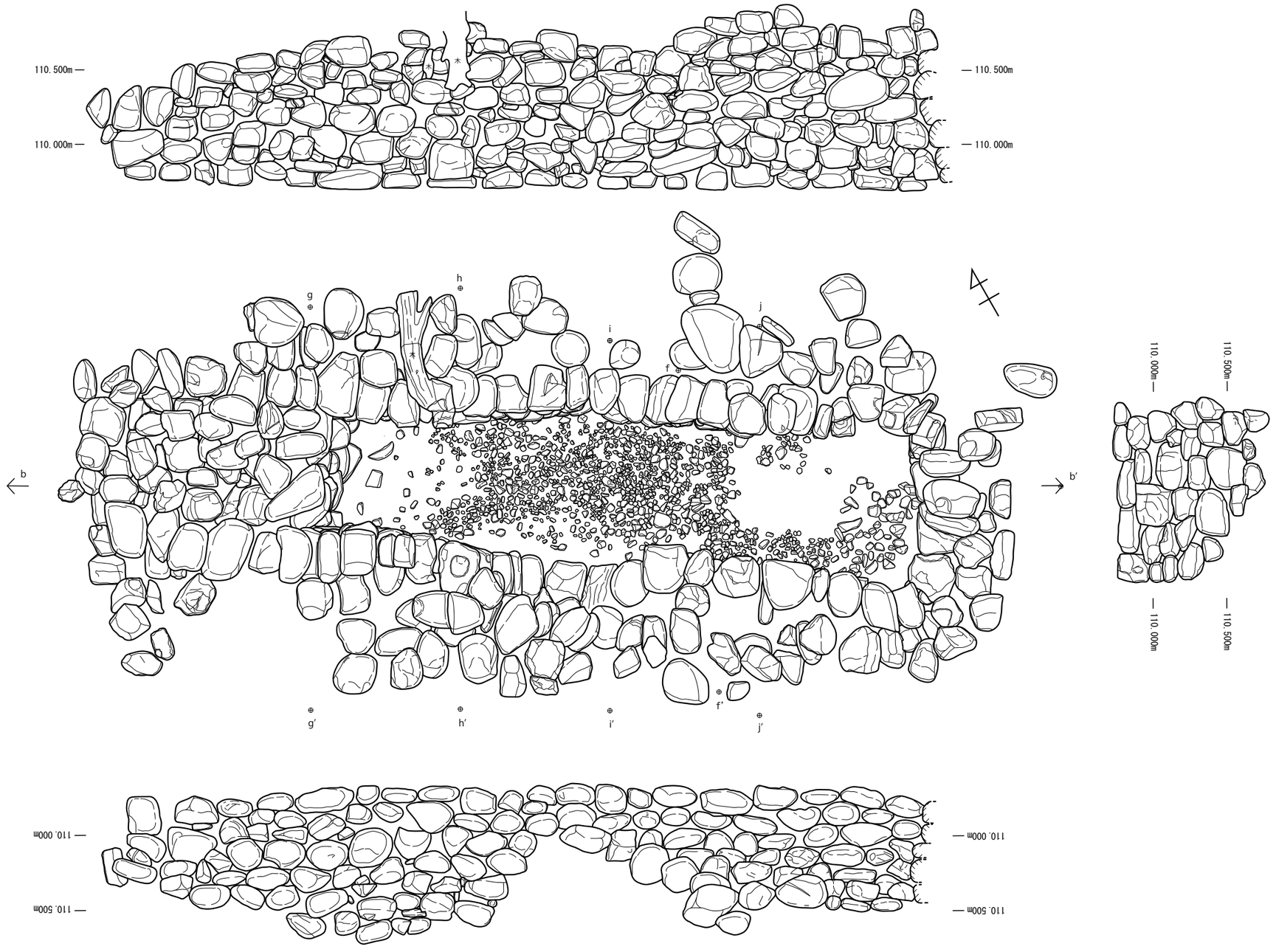
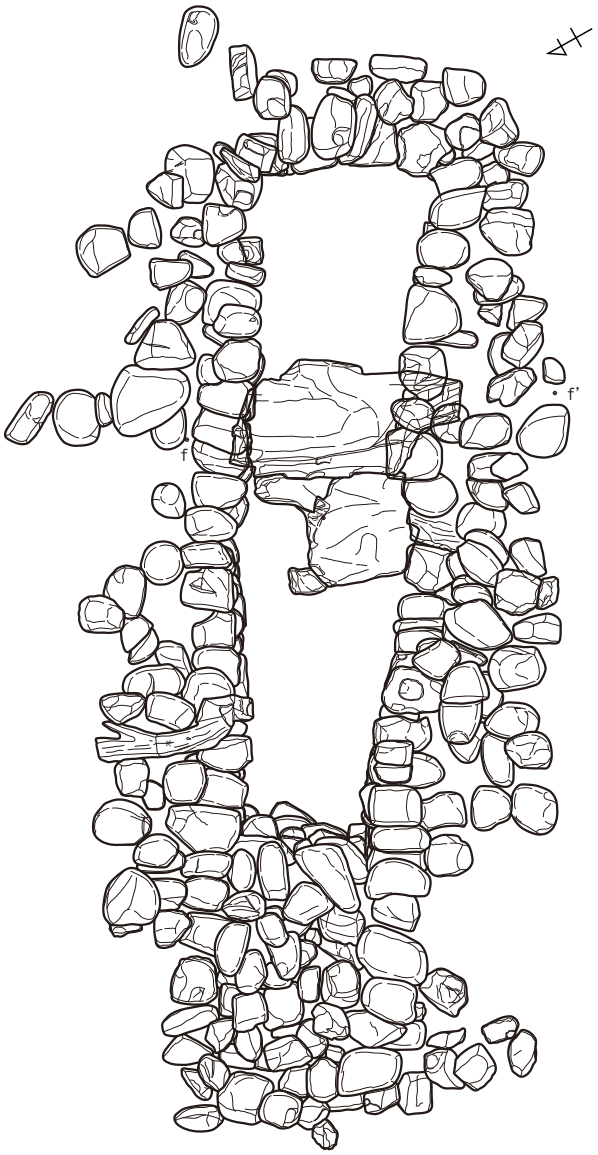


図16　坂戸上野古墳石室展開図(S=1/30)



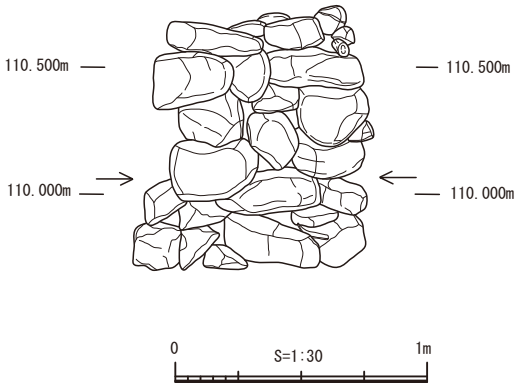


図 18　閉塞部分立面図（玄室から）

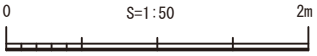
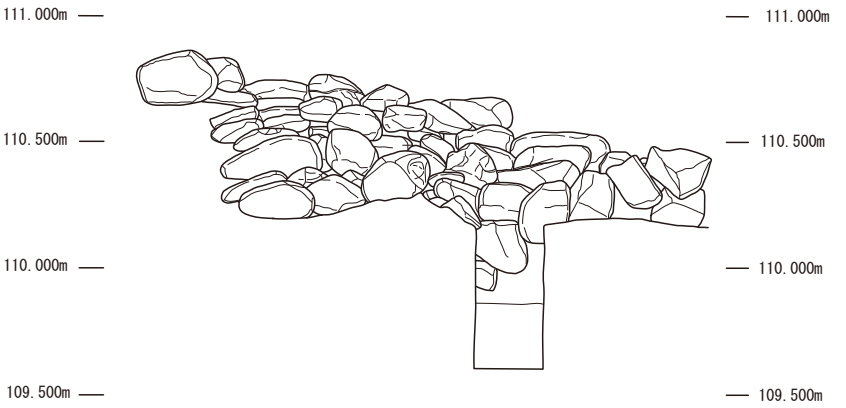


図 17　石室平面図（天井石重ね）



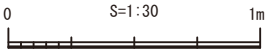


図 19　閉塞石立面図（羨道入口から）

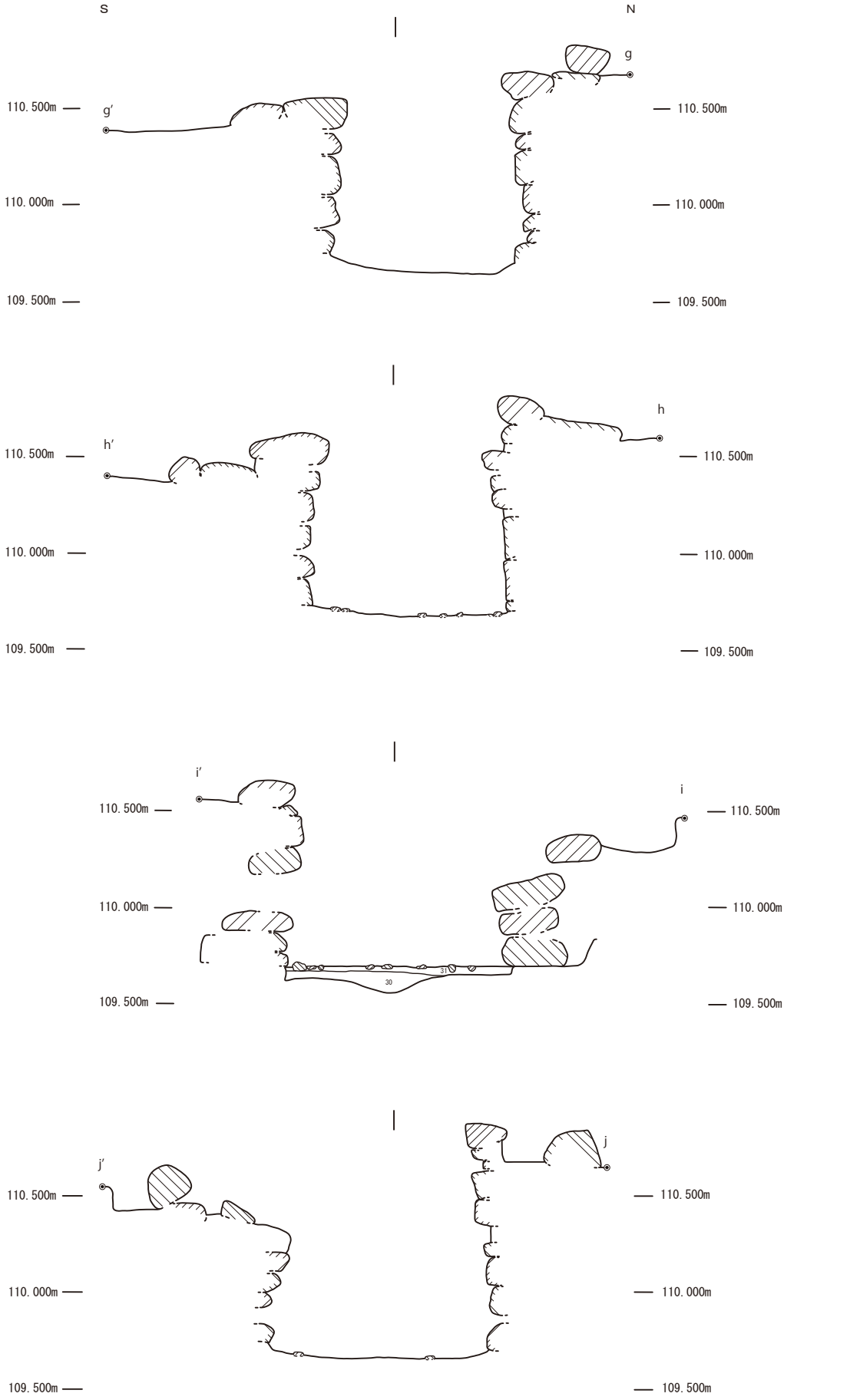


図 20　石室断面図

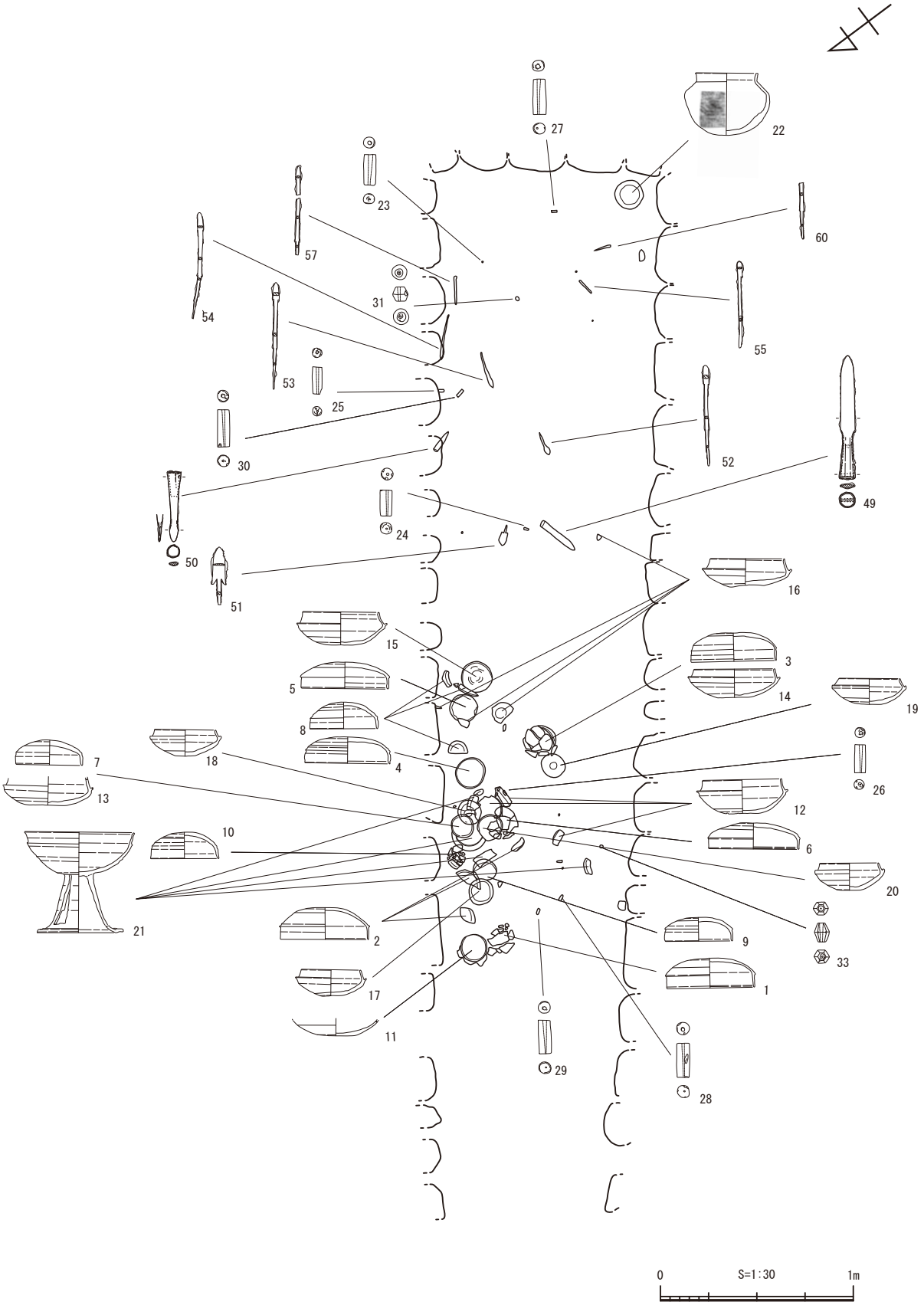


図21　床面遺物出土状況平面図（土器・鉄器はS=1/10、玉類はS=1/5）

第２節　遺物

石室内からは須恵器、玉類、鉄製品が出土している。墳丘盛土中からは縄文土器や石鏃が、石室の堆積土からは山茶碗の破片や五輪塔の一部が出土している。

須恵器

杯蓋は 10 点が出土している。型式的には 1 ～ 3、4 ～ 6、7 ～ 10 の 3 グループに分けることができる。1 はやや焼成が不良であるが、1 ～ 3 は口径が 14.6 ～ 15.2cm を測り、天井部と口縁部に明確な稜をもち、口縁部の立ち上りは直線的である。1・2 は口縁端部内面に一条の沈線がめぐり、3 は面取りしている。これらは H-61 号窯式期の範囲内でおさえられる。4 ～ 6 は口径は 1 ～ 3 と近似しているが、器高がやや低くなる。口縁部の立ち上りがやや短くなり、肥厚し、口縁端部を面取りするもの（4・5）と、一条の沈線が巡るもの（6）がみられる。これらは蝮ヶ池窯式期の範疇でとらえられる。7 ～ 10 は口径が 11 ～ 12cm に収まり、口縁立ち上り部分と天井部の間の稜はゆるい。10 のように口縁端部を面取りするものがみられるが、7 ～ 9 は丸みをもつ。これらは H-44 号窯式期から H-50 号窯式期にかけての時期と考えられる。

杯身は 10 点が出土し、底部しか残存していない 11 を除いて、12 ～ 14、15・16、17 ～ 20 の 3 グループに分けることができる。12 ～ 14 は受部の立ち上がりは低く、口縁端部は丸みを帯びる。12 は受部付近には明瞭な稜がみられ、13 も底部はやや扁平であるが、成形は 12 と同様である。これらは H-61 号窯式と考えられる。15・16 は受部の成形には違いがみられるが、口縁部は内反し、内面に沈線が一条巡る。口径は 12 ～ 14 のグループに比べ、やや小さくなる。これらは蝮ヶ池窯式期と考えられる。17 ～ 20 は口径が 10cm 前後であり、口縁部は低くなる。受部の立ち上がりは高く、18 ～ 20 は受部外面に面がみられる。これらは H-44 号窯式期から H-50 号窯式期にかけてのものと考えられる。

21 は H-61 号窯式期の長脚 1 段の高杯である。口縁部内面には緩やかな段が、外面には 2 つの稜がみられる。脚部には 3 方向に二等辺三角形の透かし孔がみられる。

22 は短頸壺である。肩部はやや上にみられ、口縁部は丸みをもたない。胴部下半～底部外面にかけて不定方向のタタキで整形されるが、内面には当て具の痕跡はみられない。底部外面には × のヘラ記号がみられる。

玉類

玉類は管玉 8 点、算盤玉 2 点、切子玉 2 点、ガラス小玉 14 点が出土している。このうち、算盤玉 1 点、切子玉 1 点、ガラス小玉 14 点は石室内の堆積土を持ち帰り、水洗によって出土したものである。

管玉は全て碧玉製であり、23 ～ 26、27 ～ 30 と大きさで二つのグループに分けられる。良く研磨され、整った円筒形を呈し、全て片面穿孔である。25 は全体が一律に濃緑色であるが、他は部分的に細く白い縞状の流紋が入る。28・29 は全体に白色の細い縞状の流紋が入り、28 は部分的に欠損している。

算盤玉（31・32）、切子玉（33・34）は水晶製である。算盤玉は片面穿孔であり透明である。31 は断面が楕円形を呈し、外面に削れた痕がみられる。32 は断面が円形を呈する。切子玉は片面穿孔

である。33 は均等に六角形に割り付けがなされ、透明部分が多く良質であり、稜は不明瞭である。34 は不均等な六角形であり、一部は不透明である。

ガラス製小玉は軟化したガラスをひきのばして製作したガラス管を裁断するという引きのばし法で製作され、孔径に上下で差は見られない。0.5 ㎜を境に丸玉と小玉を分けると 47 のみが丸玉といえる。黄色の丸玉は不透明であり、48 の黄色の小玉も同様である。全体的に丸みを帯びた形状であり、47 は片方は平坦であるが、片面は斜めになっている。48 は上下に平坦面を有する。

青色の小玉は臼形が多く、上位片に平坦面をもつものが 3 点と少ない。比較的長いものはねじきりの痕跡のあるものが目立ち、研磨されていないものがみられる。

鉄製品

鉄製品は、玄室内から鉄鉾、石突、鉄鏃、刀子が出土しており、56、59、64 の鉄製品は玄室床面付近の堆積土を水洗して出土している。刀子は玄室床面付近より上位の堆積土から出土している。

49 は鉄矛である。全長 21.3cm、刃部長 12.8cm、刃部最大幅 2.6cm、刃部最大厚 0.7cm、袋部長 7.5cm、袋部最大径 2.8cm である。刃部は鎬式で、関部をもつ。袋部は、錆のため明瞭ではないが、一部に稜線の存在を認めることから、多角形袋部と判断した。おおむね八角形袋と考えて良いと思われる。袋端部は、抉りのない直基式であり、合わせ目を持たない。袋部内部には鉄矛と柄部を固定する目釘が遺存している。目釘は一文字目釘である。目釘は、実測図向かって右側が太く、左側の方が幅が狭くなるテーパー状であり、実測図向かって右側から左側へ向けて挿入されたものと考えられる。X 線ラジオグラフを見ると袋部と刃部の境界が見えるため、もともと刃部に茎がある構造であった可能性があるが、断定することはできない。加えて、刃部と袋部の境界部分には何らかの突起が確認できるが、これが何かは明らかにできていない。

50 は石突である。全長 12.0cm、石突先端長 2.1cm、石突先端最大幅 1.5cm、石突先端最大厚 0.5cm、袋部長 9.1cm、袋部最大径 2.4cm である。石突は、通常は円錐形を呈しているため関部を持たないが、本例は関部をもち刃部と袋部の境界が明瞭な構造となっている。袋部は、円形袋部であり、合わせ目をもつ。この袋部の合わせ目は、実測図向かって左側の合わせ目端部が右側の合わせ目端部に重なっている。袋部の合わせ目は、柄との固定の際に径を調整できる「あそび」と考えられているが、本例の場合は柄の径と石突袋部の径が合わなかったため、袋部の径をかなり小さくしている可能性がある。袋端部は直基式である。袋部には、目釘孔が確認できるが、目釘自体は遺存していない。目釘孔は、一孔にのみ確認でき、この孔と向かい合う位置には、目釘孔は確認できない。つまり、目釘は、一方向から挿入される目釘、すなわち片側目釘であった可能性が高いと考えられる。X 線ラジオグラフをみても、鉄矛とは異なり袋部と石突先端部の合わせ目は確認できず、一体で製作されたものであるとみられる。

出土した鉄鏃は全て平根形であり、形状の分かるものは腸抉柳葉式 1 点、他は全て柳葉式長頸鏃である。51 は腸抉柳葉式鉄鏃である。刃部、茎部が欠損しているが、全長 9.9cm を測る。関部は直線的である。52 は全長 17.4cm、刃部長 3.3cm、頸部長 7.8cm、茎部長 6.3cm である。逆刺、関部ともに直線的である。53 は全長 18.3cm、刃部長 3.0cm、頸部長 8.3cm、茎部長 7.0cm を測る。他の長頸鏃に比べ、刃部が幅広く、先端ですぼまる形状であり、逆刺、関部ともに直線的である。54 は茎部がわずかに欠損しているが、ほぼ完形である。全長 18.2cm、刃部長 3.1cm、頸部長 7.7cm、茎部長 7.4cm を測る。刃部の逆刺はわずかにみられ、関部は角関である。55 は全長 14.9cm、刃

部長 2.8cm、頸部最大幅 1.2cm、頸部長 12.1cm を測る。逆刺は片方が欠損している。関部は有さず、頸部にわずかに木質残存がみられる。56 は茎部が欠損しており、全長 11.2cm を測る。逆刺は片方が欠損しているが、直線的である。関部はやや外側に開く台形関であり、身部の断面形状は長方形である。57 は茎部は欠損しており、全長 15.8cm を測る。刃部の断面形状はレンズ状を呈し、関部はやや外側に開く。58 は柳葉式長頸鏃の刃部であるが、逆刺部分はみられない。59・60 は長頸鏃の頸部及び茎部であり、関部は 59 は角関、60 は台形状を呈する。

63 は刀子であり、全長 10.8cm を測る。関部はゆるやかな形状となっており、身部には木質が残る。

64 は責金具である。残存長は 2.8cm であり、やや開いている部分も見られるが、復元すると直径約 2.7cm となる。内側には目釘孔が一ヶ所、目釘孔と近い位置に鋲が一ヶ所みられる。鋲の大きさと石突の目釘の大きさが一致することから、石突の責金具と考えられる。

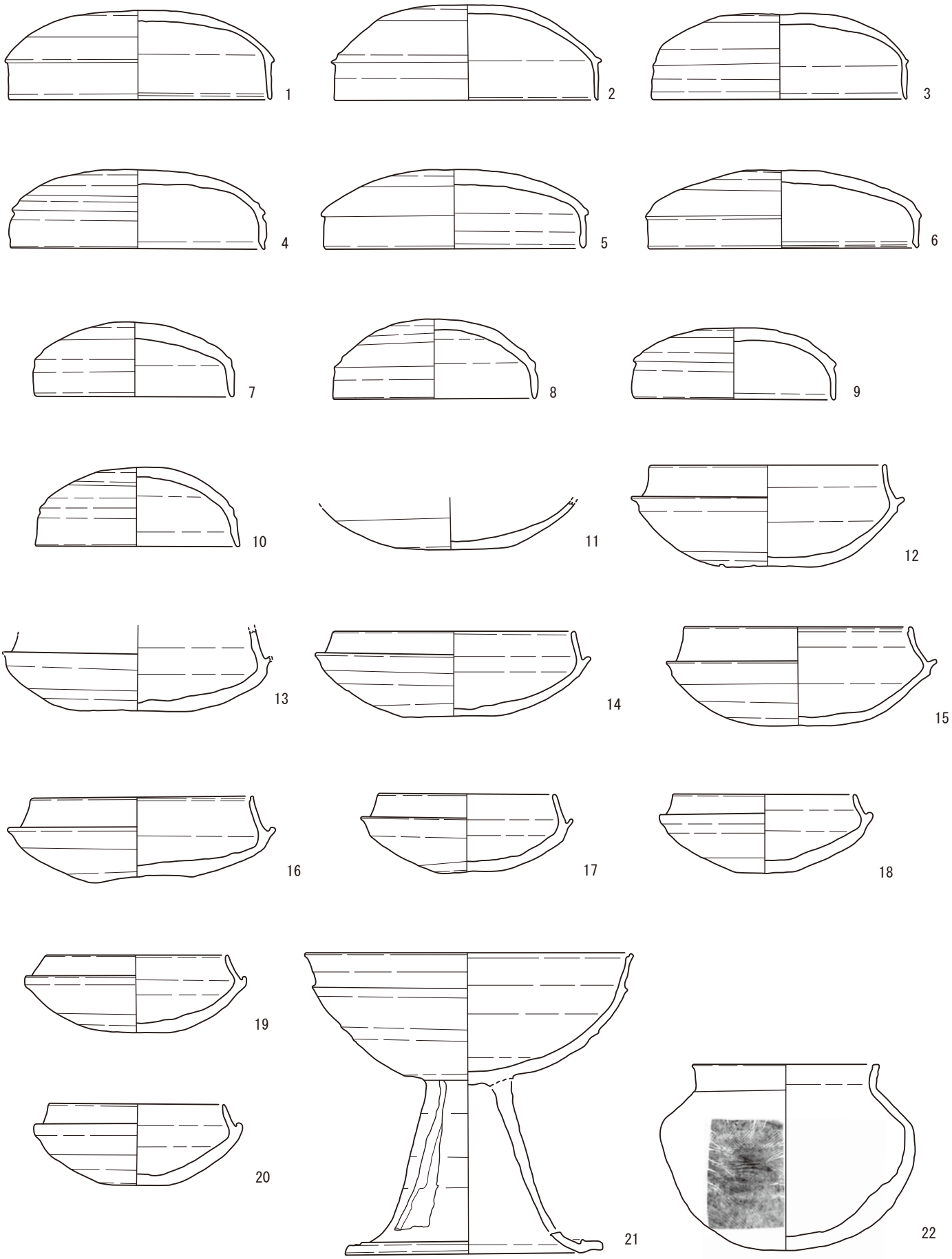


図 22　坂戸上野古墳出土遺物 1

0　S=1:3　10cm

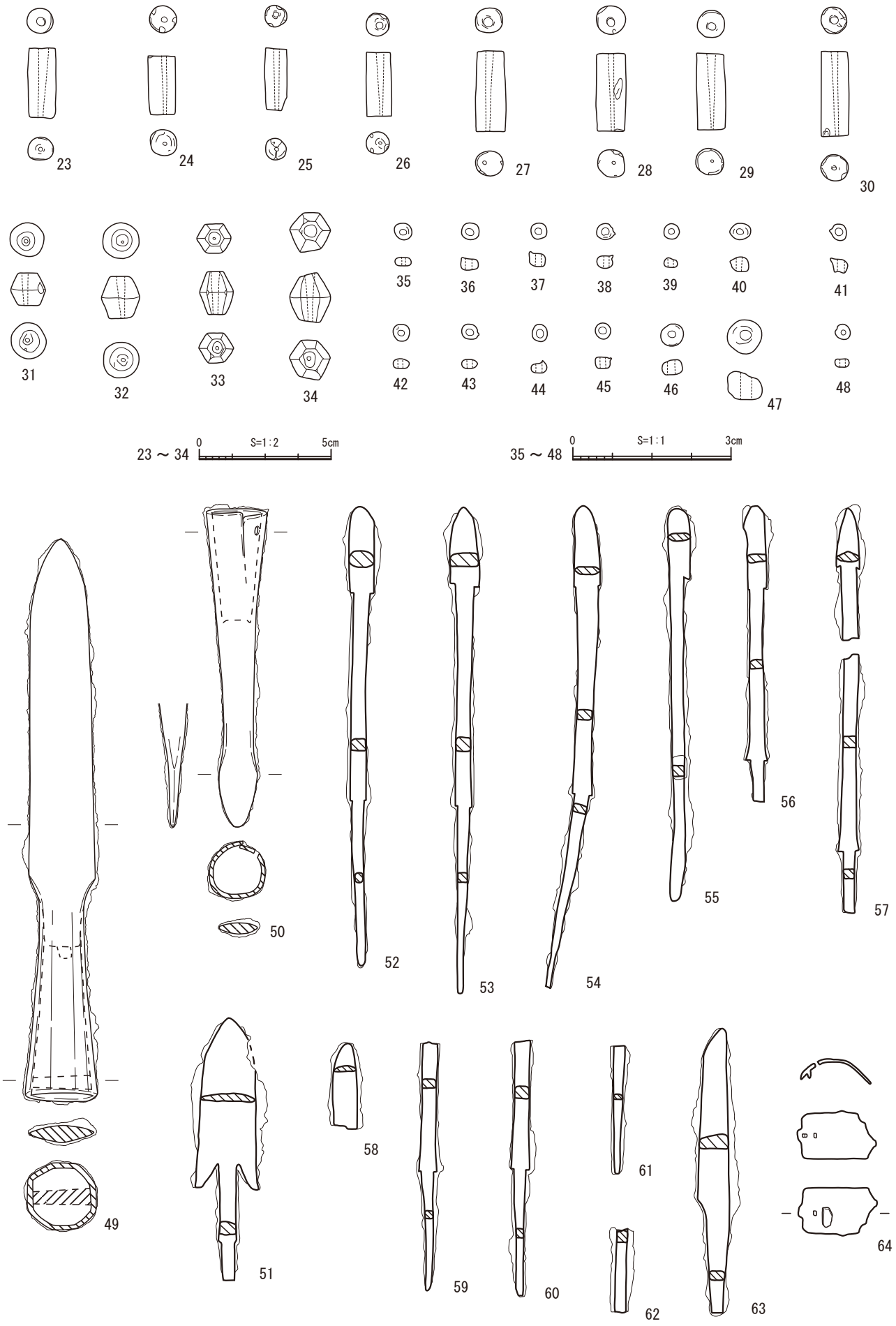


図 23　坂戸上野古墳出土遺物 2

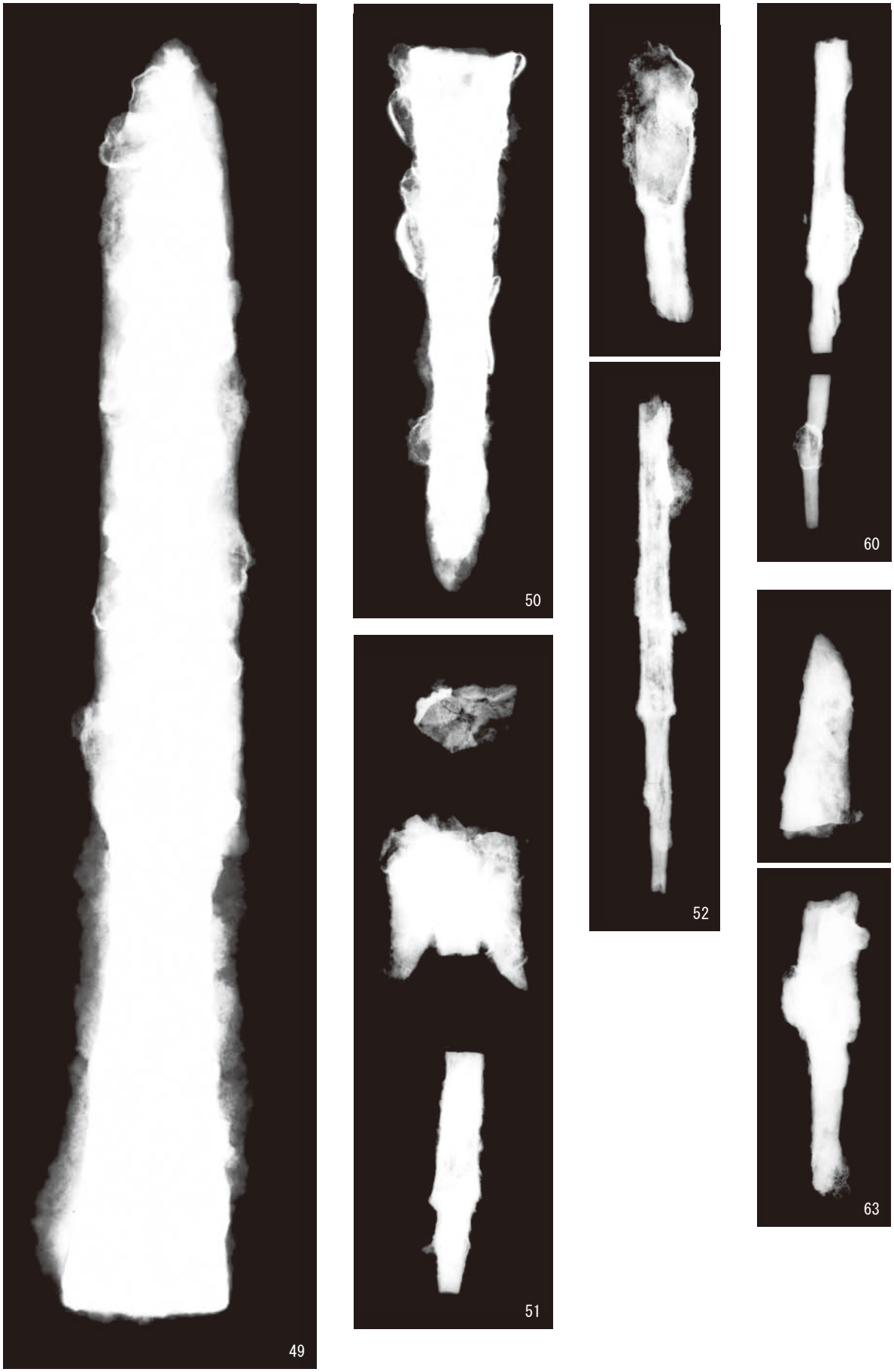


図 24　鉄製品 X 線写真

番号	写真	調査区・遺構	種類	器種	口径	器高	その他	胎土	焼成	色調	残存率（%）	成形・調整	ロクロ	その他	時期
1	1	玄室内	須恵器	杯蓋	15.1	5.1		密	やや不良	内・外面　褐色、断面　黄白色	口縁部5	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	左		H-61
2	2	玄室内	須恵器	杯蓋	15.2	5.5		密	良好	内・外・断面　灰色	口縁部60	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	左		H-61
3	3	玄室内	須恵器	杯蓋	14.6	4.9		密	良好	内・外・断面　灰色	口縁部70	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	左		H-61
4	4	玄室内	須恵器	杯蓋	14.5	4.5		密	良好	内・外・断面　灰色	口縁部85	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	左		（＋）
5	5	玄室内	須恵器	杯蓋	14.8	4.5		密	やや不良	内・外・断面　黄白色	口縁部5	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	左		（＋）
6	6	玄室内	須恵器	杯蓋	15.4	4.5		密	やや不良	内・外・断面　黄白色	口縁部5	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	左		（＋）
7	7	玄室内	須恵器	杯蓋	11.2	4.3		密	やや不良	内・外面　黄白色、断面　灰白色	口縁部60	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	右		H-44～H50
8	8	玄室内	須恵器	杯蓋	11.5	4.6		密	やや不良	内・外・断面　灰白色	口縁部35	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	左		H-44～H50
9	9	玄室内	須恵器	杯蓋	11.4	4.1		密	良好	内・外・断面　灰色	口縁部80	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	左		H-44～H50
10	10	玄室内	須恵器	杯蓋	11.6	4.5		密	やや不良	内・外・断面　灰白色	口縁部25	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	左		H-44～H50
11		玄室内	須恵器	杯身	—	2.8		密	やや不良	内・外・断面　黄白色	—	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	右		
12	12	玄室内	須恵器	杯身	13.6	5.8	受部径15.7	密	良好	内・外・断面　灰色	口縁部85	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	右		H-61
13	13	玄室内	須恵器	杯身	—	4.7		密	やや不良	内・外面　黄白色、断面　灰白色	底部100	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	左		H-61
14	14	玄室内	須恵器	杯身	13.8	4.9	受部径15.8	密	良好	内・外・断面　灰白色	口縁部95	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	左		H-61
15	15	玄室内	須恵器	杯身	13.0	5.6	受部径15.5	密	良好	内・外・断面　灰色	口縁部95	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	右	口縁部内面に一条の凹線が巡る。	（＋）
16	16	玄室内	須恵器	杯身	12.7	4.6	受部径15.2	密	良好	内・外・断面　灰色	口縁部65	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	左	口縁部に沈線が一条巡る。	（＋）
17	17	玄室内	須恵器	杯身	10.0	4.5	受部径12.2	密	良好	内・外・断面　灰色	口縁部90	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	右		H-44～H50
18	18	玄室内	須恵器	杯身	10.4	4.5	受部径12.1	密	やや不良	内・外・断面　灰白色	口縁部85	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	左		H-44～H50
19	19	玄室内	須恵器	杯身	10.3	4.4	受部径12.7	密	やや不良	内・外・断面　灰白色	口縁部70	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	左	底部内面に横ナデ調整。	H-44～H50
20	20	玄室内	須恵器	杯身	10.0	4.7	受部径11.7	密	やや不良	内・外面　黄白色、断面　灰白色	口縁部35	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	左		H-44～H50
21	21	玄室内	須恵器	高杯	18.7	17.4	脚端部径14.8	密	良好	内・外・断面　暗灰色	口縁部70	回転ナデ		長脚一段透かし。	H-61
22	22	玄室内	須恵器	短頸壺	10.5	10.7	胴部最大径14.8	密	良好	内・外・断面　灰色	口縁部100	胴部下半から底部外面に不定方向のタタキ		底部外面に「×」のヘラ記号あり。	

番号	写真	調査区・遺構	種類	材質	径	長さ	孔径	色調	その他
23	23	玄室内	管玉	碧玉	1.1	2.6	上面0.35、下面0.2	濃緑色	
24	24	玄室内	管玉	碧玉	1.1	2.2	上面0.2、下面0.1	濃緑色	
25	25	玄室内	管玉	碧玉	0.9	2.4	上面0.2、下面0.15	濃緑色	
26	26	玄室内	管玉	碧玉	1.0	2.4	上面0.3、下面0.1	濃緑色	
27	27	玄室内	管玉	碧玉	1.2	3.0	上面0.35、下面0.2	濃緑色	
28	28	玄室内	管玉	碧玉	1.2	2.9	上面0.25、下面0.1	濃緑色	
29	29	玄室内	管玉	碧玉	1.2	2.9	上面0.35、下面0.1	濃緑色	
30	30	玄室内	管玉	碧玉	1.1	3.2	上面0.3、下面0.1	濃緑色	
31	31	玄室内	算盤玉	水晶	1.4	1.3	上面0.3、下面0.2	透明	
32	32	玄室内	算盤玉	水晶	1.5	1.6	上面0.4、下面0.15	透明	
33	33	玄室内	切子玉	水晶	1.3	1.1	上位面0.4、下面0.1	透明	
34	34	玄室内	切子玉	水晶	1.6	1.9	上面0.5、下面0.15	透明	
35	35	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.2	0.1	青色	
36	36	玄室内	小玉	ガラス	0.4	0.25	0.15	青色	
37	37	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.25	0.1	青色	
38	38	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.25	0.1	青色	
39	39	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.2	0.1	青色	
40	40	玄室内	小玉	ガラス	0.4	0.3	0.1	青色	
41	41	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.3	0.1	青色	
42	42	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.2	0.1	青色	
43	43	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.2	0.1	青色	
44	44	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.2	0.1	青色	
45	45	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.25	0.1	青色	
46	46	玄室内	小玉	ガラス	0.4	0.3	0.1	緑青色	
47	47	玄室内	丸玉	ガラス	0.65	0.55	0.2	黄色	
48	48	玄室内	小玉	ガラス	0.3	0.2	0.1	黄色	

番号	写真	種類	型式	全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	頸（身）部長	頸（身）部幅	関部幅	茎部長	その他
49	49	鉄鉾		21.3	12.8	2.6	0.7	—	—	—	—	袋部長7.5、袋部最大径2.8
50	50	石突		12.0	石突先端長2.1、石突先端最大幅1.5、石突先端最大厚0.5							袋部長9.1、袋部最大径2.4
51	51	長頸鏃	腸抉柳葉式	（9.9）	6.5	2.8	0.3	（2.0）	0.7	0.7	（1.4）	
52	52	長頸鏃	柳葉式	17.4	3.3	1.3	0.7	7.8	0.6	0.4	6.3	
53	53	長頸鏃	柳葉式	18.3	3.0	1.1	0.5	8.3	0.6	0.7	7.0	
54	54	長頸鏃	柳葉式	（18.2）	3.1	1.0	0.3	7.7	0.6	0.7	（7.4）	
55	55	長頸鏃	柳葉式	14.9	2.8	1.2	0.3	12.1	0.7	—	—	逆刺一部欠損。頸部に木質残存。
56	56	鉄鏃	柳葉式	（11.2）	3.1	0.7	0.3	（6.6）	0.6	0.8	（1.5）	
57	57	鉄鏃	柳葉式	（15.8）	（2.3）	0.8	0.4	（11.2）	0.5	0.8	（2.3）	
58	58	鉄鏃	柳葉式	（3.2）	（3.2）	0.9	0.3	—	—	—	—	
59	59	鉄鏃		（9.4）	—	—	—	（4.9）	0.5	0.6	4.5	
60	60	鉄鏃		（9.6）	—	—	—	（4.8）	0.5	0.7	（4.8）	
61	61	鉄鏃		（4.9）	—	—	—	—	—	—	（4.9）	
62	62	鉄鏃		（3.1）	—	—	—	（3.1）	0.4	—	—	
63	63	刀子		10.8	6.5	1.3	0.5	4.3	0.7	1.2	—	身部に木質残る。
64	64	責金具		全長（2.8）、幅1.8								

表３　坂戸上野古墳遺物観察表

第３節　まとめ

坂戸上野古墳は、市内では四例目の竪穴系横口式石室である。竪穴系横口式石室は西三河から当地域に入ってきたと考えられており、木曽川中流域で始めに導入された石室である。

他の竪穴系横口式石室は市内では羽崎大洞３号墳、可能性が高いと考えられる瀬田神崎山古墳、大森新田５号墳がみられる。羽崎大洞３号墳や神崎山古墳、大森新田５号墳、坂戸上野古墳は点在しており、それぞれの地区の後期群集墳の中で最初に造営された古墳に位置付けられる。

各竪穴系横口式石室の概要をみてみよう。羽崎大洞３号墳は片袖式であり、西方向に開口している。小さめの石材も用い、持ち送りがみられず、羨道部が短いなどの特徴がみられる。瀬田神崎山古墳も片袖式であり、持ち送りはみられず、礫床はみられない。大森新田５号墳は、羽崎大洞３号墳と袖の向きは逆ではあるが、片袖式であり、やはり持ち送りはみられない。これに対し、坂戸上野古墳も持ち送りはみられず、やや弱いが片袖式であることから、当地域の導入期の竪穴系横口式石室と同様の傾向にある。

これらを含む古墳群では、それ以後横穴式石室が主流を占める中で、初期に築かれた古墳のみが竪穴系横口式石室を採用している。坂戸上野古墳も近隣に１～２基の古墳があったといわれるが、羽崎古墳群や大森古墳群のような数は知られておらず、以後の変遷は明らかにできない。

坂戸上野古墳は、丘陵頂部に立地し北側には沖積地が広がるため、当所からは広い範囲を見渡すことができる。墳丘規模や副葬品として鉄鉾や石突、豊富な玉類の出土から考えると、被葬者は後期古墳群形成の初期段階である６世紀前半に周辺に影響を及ぼしていたムラ長クラスの被葬者像が推定できよう。

図版 1

SB1 検出状況（南より）

SB1 完掘状況（南より）

SB2 東側土層（南より）

SB2 炉跡部分土層（南西より）

SB2 炉跡石材点在状況（東より）

SB2 炉跡（東より）

SB2 遺物出土状況（西より）

SB2 完掘状況（北より）

1
2

3

8

9

10

13

14

16

17

18

19

20

27

30

31

図版３

調査前全景（北より）

墳丘東側トレンチ北壁土層（南西より）

墳丘西側トレンチ北壁土層（南東より）

墳丘北側トレンチ東壁土層（南西より）

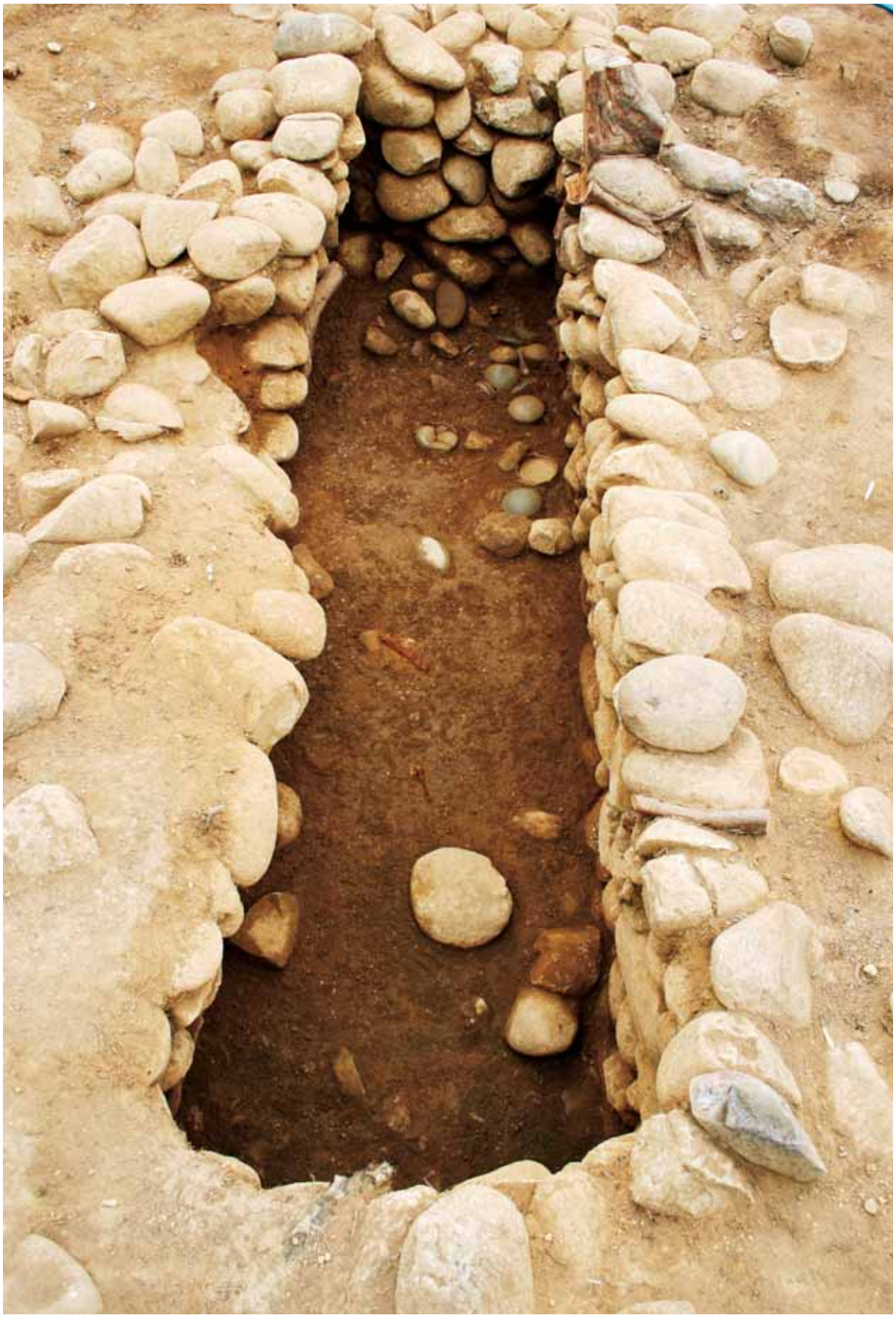
墳丘南側トレンチ西壁土層（北東より）

天井石検出状況（南より）

石室内埋土堆積状況（東より）

閉塞石検出状況（西より）

図版５



石室床面付近遺物出土状況（東より）

古墳完掘状況（西より）

石室礫床検出状況（西より）

図版７

閉塞石付近遺物出土状況（西より）

鉄鉾・鉄鏃出土状況（西より）

奥壁角短頸壺出土状況（西より）

閉塞石除去後の羨道部床面下配石状況（西より）

玄門部の閉塞状況（東より）

石室南壁（北西より）

石室北壁（南西より）

石室奥壁（西より）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

図版９

12

13

14

15

16

17

18

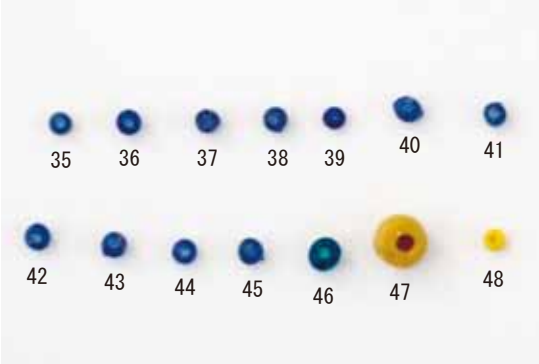
19

20

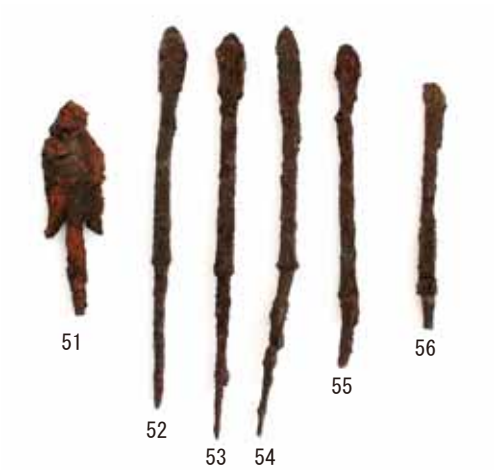
22

21

31
32
33
34


35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

23
24
25
26
27
28
29
30


51
52
53
54
55
56

57
58
59
60
61
62

63

49

49

50

50

64

64

64

報　告　書　抄　録

ふ り が な	さかどうえのいせき・こふん
書　　名	坂戸上野遺跡・古墳発掘調査報告書
副　書　名	運動公園整備事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	可児市埋文調査報告
シリーズ番号	46
編 集 者 名	長江　真和　　初村　武寛　　平井　義敏
編 集 機 関	可児市教育委員会
所　在　地	〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目１番地
発行年月日	西暦 2014 年 9 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード		北緯	東経	調査期間 面　　積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
坂戸上野遺跡（さかどうえのいせき）	岐阜県可児市坂戸（ぎふけんかにしさかど）972 番地 1 外	21214	4729	35° 24′ 50″	137° 02′ 10″	20100510 ～ 20100817 1300 ㎡	運動公園 整備事業
坂戸上野古墳（さかどうえのこふん）	岐阜県可児市坂戸（ぎふけんかにしさかど）972 番地 1 外	21214	4728	35° 24′ 50″	137° 02′ 10″	20100510 ～ 20100817 1300 ㎡	運動公園 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂戸上野遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居	縄文土器、石器	
坂戸上野古墳	古墳	古墳時代	竪穴系横口式石室	須恵器、鉄製品、玉類	鉄鉾や石突、責金具などが出土。

坂戸上野遺跡・古墳発掘調査報告書

平成 26 年 9 月 30 日　印刷
平成 26 年 9 月 30 日　発行

編集・発行　可児市教育委員会
〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目１番地
Tel　0574-62-1111　Fax　0574-63-6751
印　　刷　丸理印刷株式会社